

はじめに

史上初めての2カ国共催となった2002年FIFAワールドカップ™(以下、文中は「ワールドカップ」と表記)が閉幕して半年になろうとしている。大会期間は、仕事も手につかず、ゲームの勝敗に一喜一憂し、メディアが伝える世界各地の様子を楽しみ、開催国民としてワールドカップそのものを感じながら、あっという間に過ぎ去った夢のような1カ月であった。そしていま、我々はすでに「ワールドカップ後」の時代に入っている。

ワールドカップの成果と課題を総括して、「ワールドカップ後」へつなげる必要があるのではないかと。サッカー・スポーツを通して21世紀の“ゆたかならしづくり”を目指すことを“志”とする異業種ネットワーク「サロン2002」は、昨年7月末に「コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム」を開催したのに引き続き、今年も「ワールドカップ総括シンポジウム」を8月上旬に開催した。東京と神戸で、それぞれ異なるテーマのもとで行ったシンポジウムは、情報交換の場であっただけでなく、“志”を同じくする人々が出会う場でもあった。

「ささえる物語」を取り上げた東京会場では、JAWOC茨城支部の長岡茂さん、宮城支部ベニューコーディネーターを務めた村林裕さん、ロシアのキャンプ地となった清水市役所の宮城島清也さんに演者としておこしいただき、活発な議論を行った。

「観戦と交流の物語」を取り上げた神戸会場では、ジャーナリストの賀川浩さんの基調講演に引き続き、英国大使館のスー木下さん、サポーターズプロジェクト2002を取りまとめたライターの橋本潤子さん、写真家の宇都宮徹壱さんにおこしいただいた。シンポジウムの内容は、本報告書の「シンポジウム報告編」に収録されている。

「特別寄稿編」は、サロン2002の会員・元会員から募集した。様々な角度からのワールドカップの体験談や考察は、ワールドカップの多様な側面を反映すると同時に、今後の貴重な財産となるものである。

「インタビュー編」は、2002年FIFAワールドカップ日本組織委員会(以下、文中は「JAWOC」と表記)国際部長の鈴木徳昭さんへのインタビューを収録した。昨年度のコンフェデレーションズカップ総括に引き続き、今回もまた、舞台裏の様々な話をお聞きすることができた。

本報告書は、ワールドカップを開催した10自治体、公認キャンプ候補地だった84自治体、各都道府県サッカー協会やJリーグ加盟クラブ、そしてそれらの地域で活動する市民団体やジャーナリストの方々に送付させていただいた。

この報告書が、ただの読み物としてだけでなく、具体的な行動のヒントとなり、また活力となることを心より願う。

2002年12月
サロン2002代表 中塚 義実

サロン2002 ワールドカップ総括シンポジウム

< 東京会場 >

「ささえる物語」を中心に

名 称 ワールドカップ総括シンポジウム(第1部) - 「ささえる物語」を中心に

主 催 サロン 2002

後 援 NPO法人日本サポーター協会

運 営 サロン 2002 ワールドカッププロジェクト

日 時 2002年8月3日(土) 13:30～17:00

会 場 東京体育館 第1研修室

内容・演者

「開催地からみたワールドカップ」

長岡 茂(JAWOC茨城支部/鹿島アントラーズ)

「キャンプ地からみたワールドカップ」

宮城島 清也(清水ナショナルトレーニングセンター)

「ベニューコーディネーターからみたワールドカップ」

村林 裕(宮城会場ベニューコーディネーター/FC東京)

司会進行 中塚 義実(サロン2002代表)

オープニング・スピーチ サロン 2002 代表 中塚 義実

サッカーを愛する皆さん、ごきげんいかがでしょうか。

2002 年のワールドカップ。夢のような1カ月が終わりました。この1カ月の過ごし方、そこで起きた出来事、触れ合った人。様々な“物語”がたくさんあると思います。ワールドカップの総括も、ピッチ内のプレーに関して、ピッチ外のプレー以外の部分に関して、あるいは研究的な視点など、様々なレベルで始まっていることと思います。

サロン 2002 について

サロン 2002 は、「2002」を団体名に付けていますが、2002 年のために活動をしている団体ではありません。“2002 年をどうやって次につなげていくか”をテーマに掲げる団体です。今回のシンポジウムも、ワールドカップを単なるイベントとして終わらせるのではなく、その成果をどのように次につなげるかを探るべく企画されたものです。

サロン 2002 は、「サッカー、スポーツを通して、21 世紀の豊かな暮らしづくり」を志す、様々な分野の人が集まった団体で、「人」と「情報」のネットワークが柱です。毎月1回の月例会が活動の中心ですが、会員外にも呼びかけて、年に1回、このようなシンポジウムを開いています。

本シンポジウムについて

このシンポジウムは、「ワールドカップ総括シンポジウム」と名付けてはありますが、2002 年大会の評価をする場ではありません。ワールドカップをめぐる様々な物語やエピソードは、まだ語られていないレベルで、あるいは大会中、語る事ができなかった話も含め、多数あると思います。そういった話の中に、ワールドカップ後の 21 世紀の豊かな暮らしづくりのヒントが、恐らくたくさん隠されているのではないのでしょうか。このシンポジウムは、東京と神戸の2会場で、テーマもそれぞれ、東京では「ささえる物語」を、神戸では「観戦と交流の物語」を中心にしながら、様々な“物語”をたくさん出し合う場にしたいと思います。そして、ここで紹介された多くの“物語”が、それぞれの現場で次に生かせるようなきっかけになればよいと考えています。

「ささえる物語」について

東京会場では「ささえる物語」を語るにふさわしい3人の方に、講演者としてお越し頂きました。はじめに、講演者のご紹介をさせていただきます。

最初に、「開催地から見たワールドカップ」というテーマで話をさせていただきます、元JAWOC茨城支部、8月1日付けで鹿島アントラーズに戻られました長岡茂さんです。次に、宮城県のベニューコーディネーターとして活躍されたFC東京の村林裕さんです。そして、「キャンプ地から見たワールドカップ」というテーマで、清水ナショナルトレーニングセンター(ロシアチームのキャンプ地)の宮城島清也さんです。

まず、3人の講演者からそれぞれ20分から30分程、それぞれの立場で出合った物語、エピソードを語って頂きます。その間、皆様のお手元にある「質問・意見表」をお書き頂き、3人の講演者のお話が終わった後、15分ほど休憩時間を取りますので、その間にこちらの方に提出して頂きます。休憩の時間はフロアと講演者とのざくばらんな情報交換の場として、後半は「質問・意見表」をベースにしながらフロアの皆さんを交えてのフリーディスカッションの場として進めていきたいと思っています。密度の濃い議論がなされ、人と人とのつながりができればと思っています。全体で3時間程度の会ですが、よろしくお願ひ致します。

では、最初の講演者であります長岡さん、よろしくお願ひ致します。

「開催地からみたワールドカップ」 長岡 茂 (JAWOC茨城支部 / 鹿島アントラーズ)

お暑い中、お集まり頂きまして、ありがとうございます。司会の中塚さんからご紹介頂きました長岡と申します。去る8月1日付けで、鹿島アントラーズの方に復職致しました。それまでの約2年3カ月間、2002 FIFAワールドカップ日本組織委員会 (JAWOC) に出向しておりました。

私が担当した会場は、職場が「鹿島アントラーズ」ということもあり、地元である茨城会場でした。今回、このような発表の場を与えて頂きましたので、皆様とワールドカップについて少しでもお話をできれば、と思っております。

2001年コンフェデレーションズカップ後のシンポジウムでもお話しさせて頂きました。今回もまたお声をかけて頂いて、コンフェデレーションズカップからワールドカップまでの一連の仕事について、自分自身としても1つの区切りをつけられると思っております。また、このような自由な雰囲気の中で皆様とお話しする機会ですから、質問票などを通じてできるだけ回答させて頂きます。遠慮なしに質問して頂きたいと思っております。

今日の話の内容は、「アジェンダ (Agenda)」にまとめました。これは普段あまり耳にしない言葉だと思っておりますが、「協議事項、防忘録」などという意味で、FIFAがミーティング等を行う場合に、議論の内容を箇条書きにして討論をする形式の名称です。今回はワールドカップに関する発表の場なので、あえてFIFAにならってこのまとめ方に従ってみました。時間が30分程ということなので、どこまでお話できるかわかりません。私もかなり話を脱線させることが多いので、その点はお許し頂きたいと思っております。

さて、本題ですが、まず、「1. オペレーション・ギャップ」について。運営面での日韓の違いという意味です。これは「日本が良い、韓国が悪い」「日本が悪い、韓国が良い」という意味ではなくて、私自身、大会運営に携わった者として感じた違い、また私なりに「こうではないか」と思ったことをお話しさせて頂きます。

次に、「2. マッチスケジュール・・・会場の選択ミス」について。今回の大会の中で、明らかに失敗だったのではないかと、思った事例がありましたので、それについて少し触れたいと思っております。

次に、「3. ナショナル・アソシエーション」について。これは簡単に言うと、今大会の参加国を指しており、茨城会場を含めて起きた出来事についてお話しさせて頂きます。

最後の「4. ボランティア、パブリック・ビューイング、ホスピタリティー」は、あまり密度が濃い話ができないと思っておりますので、サラリとお話しさせて頂きます。

「韓国」のずさんな運営

では、「1. オペレーション・ギャップ」についてです。まずひとつの記事をご紹介します。準決勝のドイツ対韓国戦前日の出来事について新聞に出ていた記事です。これによると、ドイツ代表が試合会場である「ソウルワールドカップ競技場」で練習をしました。

今大会では、チーム練習の最初の15分間は、無条件でメディアに公開することがFIFAから義務づけられており、それ以後の練習の公開、非公開については、チームに選択権が与えられていました。そして、ドイツチームは非公開練習を選択しました。しかし、決められた15分を過ぎても韓国のメディアがスタジアムの中にいた、とこの記事は書いています。さらに、キーパー練習を行っているカーン選手の後方のスタンドで、赤い巨大な横断幕を持った韓国サポーターがあれこれ打ち合わせをしながらウロウロしていた、ということも報じています。

本来であれば、試合の前日は、「アクレディテーション・カード (AD カード)」という顔写真の入った身分証明証がないとスタジアムの中には入れないことになっています。サポーターがADカードを持っているわけがありません。「ADカードを持っていない人が、なぜスタジアムにいるのか？」という疑問があります。新聞記事からの情報から考えられることは、会場を運営・警備している関係者が通した以外に考えられません。運営する側にとって、こうした点は非常に大きな問題ではないかと思っております。

次は、イタリア対韓国戦の時に人文字用のカードを座席に準備をしていたとして、イタリアサッカー協会がFIFAに抗議をしたことを伝えている記事です。このような準備は本来「許されないこと」であって、主催

者であるFIFAも「以後そのようなことがないようにする」と回答をしました。しかし、記事の最後に、この太田スタジアムの関係者が「このムードの中で(このような行動を)禁じることは難しい」と答えています。

国をあげて代表チームを熱狂的にサポートしているという雰囲気であって、確かに「難しいこと」は理解できますが、でも絶対にしてはいけません。これを許してしまえば「何でもあり」になってしまいます。開催国であっても、こういった行為は絶対に「許されないこと」だと思います。

蔚山(ウルサン)文殊スタジアムで行われたドイツ対アメリカ戦でも問題がありました。ちょうど私はテレビ中継を見て不思議に思い、あとでニュースを見て納得しました。その映像では、アメリカと韓国国旗を持った学生が大挙してゴール裏にいて、旗を振っていました。この様子を見て、「こんなに学生がまとまって見ているなんて変だなあ」と思いました。

韓国側はスタジアムの空席を埋めるため、急きょ、無料で観客を入場させてしまったのです。これはとても大きな問題でした。何故なら、苦勞してチケットを購入された観客の中に、客席が埋まっていないからという理由で無料の観客を入場させてしまっただけで大きな不公平を生むからです。これは、空席ができたからといって、その辺を歩いている人にチケットを配布して座ってもらうことと同じではないでしょうか。

日本対トルコ戦が行われた宮城スタジアムで空席が発生したのは、FIFAがパイロン社側の明らかなミスですから、彼らの責任として追及すべき問題です。しかし、それでも良いからと席を埋めてしまうと、見栄え的には満員になりますが、チケットが売れていないという問題が覆い隠されてしまって、うやむやになってしまうでしょう。そういう意味で、日本側で売れる「50%のチケット」すべて売った上では、あの形でやむを得なかったのではと基本的には思っています。しかし、われわれ運営に携わった者もファンの皆さんも、FIFAやパイロン社のミスを見逃すことはできないのは当然のことと思います。

「空席問題」は、今大会の非常に大きな汚点ですが、ただ私は、メディアもこの問題の本質をきちんと伝えていなかった部分に不快感を感じています。

今大会のチケットの販売方法については、日本、

韓国、FIFAの3者間で分配ルールが決まっていた。開催国とFIFAが50%ずつ分配したのです。日本の分配分については、日本で行われる32試合について前売りで完売しました。韓国については、チケットの価格がKリーグなどと比べて格段に高いということもあり、会場によっては随分と売れ残っているということは、新聞やインターネット等をチェックされていた方はご存じかと思います。

日本の会場における空席は、FIFAが持っている「50%のチケット」が売れ残ってしまったことによって生まれた空席です。茨城会場については、6月2日の試合で空席がありましたので、その翌日と翌々日に、FIFAが持っている「50%のチケット」の権利をJAWOCへ委譲しようという了解を得ることができて、初めてそれ以降の試合の空席分のチケットを売ることができたのです。もし、FIFAがあくまでも自分たちの権利を主張し続ければ空席のままもあり得ましたし、それに対してJAWOCがチケット販売権を強引に奪うことはできません。何故なら、ワールドカップとはFIFAが主催する大会だからです。イベントを主催するリスクは、あくまでも主催者が負います。私はJAWOCに勤めていたからこれを弁護するのではなく、あくまでのこれはFIFAの「権利」の問題ということ、この場で皆様と確認させて頂きたいのです。事前の取り決めでFIFAが「50%分の権利を持つ」ことに合意したわけですから、FIFAがその権利を放棄しない限り、彼らとその権利を他者に譲る義務もありません。新聞記事は、空席問題に対して無策なJAWOCを責めましたが、残念ながらJAWOCは、FIFAの承認なしには何もできません。「空席の現状」を両国の組織委員会が交渉のテーブルに乗せて、FIFA側もこれではマズイと思ったのか、初めて「50%の権利」を手放して席を埋めることができたのです。

「許されること」と「許されないこと」がある

私は、既に申し上げた通り、今大会の様々な出来事の中で、開催国として「許されること」と「許されないこと」とがあると思えました。そこで、この見地から運営面でのいくつかの出来事を見直してみようと思います。

第1に、「開催国の自国のサポーターがスタジアム

の中にたくさんいる」こと。これは「許される」ことだと思います。全体の50%のチケットが日本、韓国それぞれの国内で販売されていますから、少なくともスタジアムの50%の席が自国のサポーターで埋まることは自然なことです。FIFAが持つ50%のチケットも、すべて対戦国に売られるわけではありませんから、当然、比率的に自国のサポーターが多いこととなります。

第2に、ルール内でのサポーターの応援について。これも「許される」ことでしょう。

第3に、逆に開催国が自国サポーターに便宜を図ること。試合の前日にスタジアムの中に入れて人文字のセッティングをするなり、様々な仕掛けをするためにADカードを持たない人をスタジアムに入れること。これは、スタジアムのセキュリティ上、絶対に許されることはありません。明らかにこれは「許されないこと」です。

第4に、主催者側が決めたルールを守らない。FIFAが決めたルールを守らないことも「許されないこと」です。

こうした運営上の問題の中で、別に韓国側の出来事を意図的に選んだ訳ではないのに、情報を整理したら韓国側のニュースが多かったことはとても残念でした。開催国としての果たさなければいけない責任とすれば、主催者側が決めたルールを守ることが、最低限のやらなければいけない義務だと思います。人によっては「やってしまったもの勝ち」という言い方をする人もいますし、「日本側がバカ正直にルールを遵守しているだけだよ」という言い方もあります。

しかし、決められたことに忠実に行動する、約束を守るということは大切なことであり、日本人の道德心の表れでもあると思います。たとえ韓国側がルールを破ったからといって、これに合わせる必要はどこにもないと思います。日本は日本のやり方、考え方で仕事をすべきです。もし、日本戦の前日に日本人のサポーターに便宜を図って、「試合前にセッティングを行っていいですよ」と許してしまえば大変なことになっていたと思います。この件に関しては、「日韓両国が同じレベルで運営ができなかった」という問題を積み残してしまったと感じています。運営面に関しては、以上が気になる点でした。

移動手段が確保できない試合スケジュール

次に、「マッチスケジュールのミス」についてです。

今大会で、サッカーを知らない人にもその風貌とプレースタイルで有名になったドイツのオリバー・カーン選手。6月15日に行われたドイツ対パラグアイ戦後の彼のコメントを紹介しましょう。

彼は、「ワールドカップではなくて、親善試合のような雰囲気だった。親善試合では集中が失われがちで、それが試合中に起きてしまった」と、ワールドカップに参加しながら、その雰囲気をみじんも感じなかったと、試合後にかなり辛らつなコメントを残したのです。私はこの試合について、私なりに分析をしてみました。

この試合の会場は、韓国・済州(チェジュ)島にある西帰浦(ソギポ)でした。観客が約2万4千人、キャパシティーの50%にも満たない観客しか入りませんでした。このドイツ対パラグアイ戦のマッチスケジュールのミスというのは、一つには交通手段の限られたソギポという済州島にある会場を選んでしまったことです。

この試合は、ラウンド16(2次ラウンド・トーナメント1回戦)でした。対戦カードが決定したのが試合日の3日前の6月12日で、パラグアイがB組2位でこの試合への進出を決めた時でした。西帰浦へ移動するための交通手段は、船か飛行機しかありません。しかも、かなり便数も限られている状態でした。西帰浦は人口が多い都市ではありません。そうした背景からすると、両チームのサポーターなり、試合を見たいという他の地域の観客にとってかなりの難関であったと想像できます。西帰浦に行く交通手段がなかったため、行きたくても行けなかったという方が多かったのではないのでしょうか。つまり需要と供給がアンマッチを起こしていたわけです。私自身も、茨城会場の試合が既に終了していたので、自分も1試合くらいは会場で試合を見たいと思い、マッチスケジュールを見て、この試合会場だったら多分、現地に行っても余裕でチケットは手に入るだろうと読んでいました。実際、そのもくろみ通りでしたが、他のサポーターと同様に交通手段の確保がまったくできなかったので、残念ながら挫折しました。

このカードが、例えば韓国の本土で行われていたら、大量の人間が移動できる交通手段を提供できたと思います。そしてもっと観客が入ったのではないか

と思います。これが1次リーグのようにあらかじめカードが決まっている試合なら、観客も航空券を予約するなり交通手段を確保することができたでしょう。その当事国の協会などからの働きかけで十分に時間があれば、交通手段の手配を組織委員会に依頼することも可能だったでしょう。

しかし、この試合はあらかじめ対戦国が決まっていない試合で、しかも3日前に決まったカードでした。ドイツチームも静岡でナイトゲームを行ってから、その翌日にチャーター便で移動をしている位ですから、一般のサポーターが十分に渡韓できる状況ではなかったようです。

これらの結果を見た限り、このゲームは試合会場の選択を誤ったために観客が入らなかった典型的な試合と考えられます。マッチスケジュールを決めるといことは、こういった観客の移動手段も考慮しなければならぬのです。

個人的には、韓国・日本の開催国側とFIFA側の考え方にギャップがあったのかと想像しています。FIFAは西帰浦で試合をしても満席になると考えていたと思いますが、その思惑と現実には大きな開きがあったと言わざるを得ません。

試合後のロッカールームはゴミだらけ？

ここまでは反省話ばかりをお話しましたが、ここからは、「ナショナル・アソシエーション(参加国)」の裏話をさせて頂きます。

日本対ロシア戦の翌日のニュースに、「ワールドカップで勝利をした日本をFIFAが褒めた」という見出しがあります。一体何を褒めたかという点、「日本チームのロッカールームが片付いていて、大変驚いた」ということです。こんな小さなことに何を驚いているのかと皆さんは思われるでしょうが、この記事の中でFIFAのキース・クーパー広報部長(当時)がコメントを寄せているとおり、「通常ではバナナの皮や空き瓶などで散らかっている」のが現実なのです。私自身も試合後のロッカールームの片付けをしますが、まさにその通りで、飲み終わったペットボトルが転がっていたり、食べ残したリンゴがシャワールームの至る所に置いてあったり、色々な所にゴミがあったりして、掃除するために20~30分ほどかかってしまうくらいに散らかっています。

ゴミを放置するほどサッカー選手には道徳心がないのか、と思う方もいらっしゃるかもしれませんが、外国の生活習慣や考え方には、日本と大きな開きがあるものです。

私がブラジルに行った時、冗談のような本当の話の話を聞きました。ブラジルは町中が結構散らかっていて、人は案外平気で町中にゴミを捨てています。私が「何であんなにゴミを捨てているのか」と現地の人間に聞いたところ、「ああいうふうには物を捨てないと、ゴミを掃除する人が失業してしまう。だから、失業しないように仕事をあげているのだよ」という答えが返ってきました。冗談だろう、と思うのですが、実際はそうした考え方が頭にあるものだから、スタジアムでも掃除をする人がいるのだから大丈夫だろうという認識が生まれ、それを普通のこととしているようです。それで誰も文句を言わないし、実際に専門的にきちんと片付ける人がいるので、そういう立ち振る舞いをしていただけなのです。ただ、日本では「散らかしたら片付ける」ということを当たり前のこととして教育されています。これが本当に「世界と日本の感覚の違いなのか」と、この記事を読みながら感じました。

サインは公平に？

次に、加熱したワールドカップ人気の中で起こった出来事で、最近女性週刊誌にたくさん掲載されています。イングランドのベッカム選手がらみの話です。

イングランドチームがキャンプを張った淡路島の津名町で、子供達との交流会が設けられました。その時にベッカムがしたサインを「不公平だ」ということで、教育委員会が回収したがために大問題となり、あらためて子供達にサインを返したという出来事がありました。それくらいにベッカム選手からサインをもらうことは大変なことなのですが、選手たちはみな快くサインの要求に応じたようです。

ただ、運営側からすれば、1人にサインをあげると不公平になる上に、多くのサインを求める人たちでごった返して警備的にも支障をきたすこともあり、できる限りサインをして欲しくないなと思っていました。選手側からすればファンサービスであり、サインは当然のことだという考え方でした。このギャップに悩まされて、とても辛い立場でした。

イングランドは、これ以外にも津名町に面白い物を残しました。例えば、イングランドサッカー協会（FA）はミュージアム用に選手のサインを入れたユニホームやポスターを津名町へプレゼントしました。また、練習用具など約4トントラック一台分をビニール袋に入れて、津名町住民に配布しました。チーム側からすれば、本国に持ち帰ることも可能なのですが、持ち帰らなければ輸送費用を節約できる、また、もらった人は喜ぶということで、FA側にとっては一石二鳥なので、感謝の意味も込めて軽い気持ちで贈りました。町の人からすれば、突然のプレゼントに戸惑っていたようですが、ともかくイングランドチームは「たくさんの物」を津名町に残していったようです。

アフリカ・サッカーのタフネスさ

茨城会場は、アルゼンチン、ナイジェリア、アイルランド、ドイツ、イタリア、クロアチアの6カ国が試合をしました。試合をするチームは、当然ですが試合会場の確認にやってきます。その対応をするのが私たちの仕事の1つなのですが、ドイツサッカー協会の方が鹿島を訪問されて、一緒に食事をした時にある質問をされました。

彼らが来たのは今年2月で、ちょうどマリ共和国でアフリカ選手権が開催された直後でした。「カメルーンチームのドイツ人監督であるシェーファー氏が、アフリカ選手権の時にマリへ行ったのだけど、その様子を長岡さんはテレビを見ましたか？」と聞かれたので、私は「いいえ、そのニュースは日本では流れていないと思うので、私は見ていません」と答えました。するとその方は、「カメルーンチームが軍用機に乗ってマリへ移動する際、荷物みたいな扱いを受けていた映像がドイツで放映されて話題になったのだよ」と教えてくれました。それを聞いて、「やはりアフリカはだいたい日本と違うな」という印象をあらためて受けました。

後にNHKの番組でその映像を見ましたが、パラシュート部隊のような状態でカメルーンの選手がジャージを着て軍用機で移動する様子が映されていました。アフリカ人の「タフネス」に驚きました。日本人には決して真似できるような感じではありませんでした。

「さあ、練習！」 えっ、ボールがない？

そのアフリカからの参加国であるナイジェリアが、茨城へ来ました。私はシドニーオリンピックの時にオリンピック組織委員会の一員として現地で仕事をさせてもらいました。私が担当したメルボルン会場で、ナイジェリアのチームと一緒にいる機会があり、様々なトラブルを経験していましたので、茨城に来る6カ国の中では特別な心構えが必要だと思っていました。

ナイジェリアは、茨城会場に入る前に神奈川県平塚市で調整キャンプを行っていました。5月31日に平塚市から茨城会場に移動してきてすぐに「今日、午後から練習をする」と申し出てきました。予定の時間通りに彼らは練習会場に到着し、練習を始めようとするときに、何かが足りないのです。なんと、1番大切なボールがないのです。チームの関係者の方が「ボールを貸してください」とリクエストしてきたのですが、「えっ、ちょっと待てよ...」と、FIFAのオフィスへ連絡をしてみました。「あの、ナイジェリアチームがボールが無いと言っているのですが...」と相談したところ、FIFAの担当者は、「チームには、既にボールを間違いなく供給しているから、（ボールが無いことは）彼らの問題だ。会場のスタッフがあたふたする問題ではないから放っておきなさい」と指示を受けました。とはいいいながらも「ボールが無い」と言うチームを放ってはおかず、FIFAの指示との板挟みになりました。最終的には、FIFAが「あなた方（会場地）の好意でボールを貸してあげることができるのであれば、貸してあげてもいいよ」ということになりました。そのかわり、「ボールを返してもらう時には、ボールの数を数えておきなさい」という一言もありました。

そんなドタバタがあった後で、ナイジェリアには練習用ボールを10個貸しました。ちょうどその翌日に、新潟でカメルーンが試合をするようになっていたので、新潟会場にいる仲間へ電話を入れました。「茨城では、ナイジェリアは1個もボールを持ってきていなかったのだけど、そっちはどう？」と聞いてみたところ、「カメルーンはボールを持ってきたよ。ただし、1個だけ...」という、冗談のような本当の話がありました。

ナイジェリアは茨城会場で6月2日に試合を行いました。ウォーミングアップで使っていたボールは、実は我々が貸したボールでした。試合が終了した後にボ

ールを返却してもらって、翌日に神戸に移動しました。次の会場地である神戸に、早速その話を連絡しました。神戸側はその情報に戸惑っていましたが、ナイジェリアが神戸に着いたときには、どこからともなくボールが30個も現れたそうです。

“氷を入れない飲料水” ドイツチームのこだわり

次に、ドイツチームの話で忘れられないのが、試合前日のスタジアムでの練習時の出来事です。

チーム練習時には、チーム用に飲み物を用意します。当然、6月ですから、飲み物も氷入りの容器なり、ドリンククーラーなどに入れて準備をしていました。どのチームにも水とスポーツドリンクの2種類を用意しておりました。練習が始まった時にドイツチームのスタッフが私のところへやって来て、「申し訳ないのですが、明日の試合の時には水やスポーツドリンクなどの飲み物はクーラーなどに入れて冷やさず、すべて机の上に置いておいて下さい」と言われました。「えっ、本当によいのですか?」、「構いません」というやりとりがありました。後日、ドイツの事情に詳しい方に伺ったところ、ドイツでは飲み物を冷やして飲むという習慣がないということでした。スポーツドリンクを飲み始めたのもごく最近のことだそうです。

例えば、バイエルン・ミュンヘンなどは、「ちょっと前までは紅茶しか飲まなかった」と、大会終了後にバイエルンのアマチュアチームでプレーされた方からこぼれ話を聞きました。「トップチームもアマチュアチームも、同じ飲み物(紅茶)しか飲ませないのですよ」と聞いて、サッカー先進国の意外なこだわりを感じました。

自分たちの基準で考えてはいけない

そういった、チームごとの様々な特色を体験させてもらいましたが、その中でFIFAの方と一緒に仕事をし忘れられないことがあります。

これは、茨城での第1戦となるアルゼンチン対ナイジェリア戦の時でした。試合前日に選手やレフェリーのユニホームの色確認などを行うために、チームの関係者を交えてミーティングを行います。その時にアルゼンチン側から「FIFA側から指示を受けた色が、紺のシャツに黒のパンツ、紺のストッキングとなっているが、ナイジェリアが(蛍光色の)緑のシャツ、緑のパンツ、

緑のストッキングだから、(アルゼンチンは)白いパンツでプレーをさせてもらいたい」と申し出がありました。私自身は、「別に問題ないから、了解するだろうな」と思っていたのですが、しかし、FIFAの関係者の回答は、違っていました。「カラーテレビで見られる国では問題ないが、例えば南米や中米ではまだまだ白黒テレビで試合を観戦する。従って、もしアルゼンチンが白のパンツを使用すると、テレビに映った時にナイジェリアと区別がつかない。だから、黒のパンツを使用欲しい。最終的な判断はFIFA大会本部が行うので、アルゼンチン側の要望は、そのまま大会本部に伝える。後程、最終的な決定をチーム側へお伝えする」というものだったのです。結論は、黒のパンツで最終決定されました。

私たちはカラーテレビで試合を見ることが、ごく普通のことと考えていたのですが、試合前のミーティング中のやり取りで感じたことは、「自分の国のことだけを考えてはいけないのだなあ」という、考えてみればごく当たり前のことでした。とても貴重な経験をさせて頂いたと思います。そういった参加チームやFIFAの関係者の方々の様々な思い出は尽きません。

「視聴率」以上の視聴者がいたのではないか

次に「パブリック・ビューイング」について、個人的な意見を述べさせて頂きます。

私自身、大会に携わっていた者として驚いたのが、国立競技場で行われていたパブリック・ビューイング、いや、有料だったので「ペイ・パー・ビューイング」でしょうか。選手がピッチ上におらず、オーロラビジョンで試合の様子を流しているだけでスタジアムが一杯になるという風景をテレビのニュースで見たときに、とても不思議な感じがしました。確かに、サッカーを応援する方々にとっては、国立競技場は非常に思い入れのある場所ですから、そこで日本代表を応援するのは、それだけで価値があるのでしょう。お金を出して、目の前に選手がいなくても同じ代表のユニホームを着た人達と時間を共有して、日本代表を応援したいという人があれだけたくさんいるという事実は、大きな驚きであると同時に、とても嬉しいことでした。

ワールドカップの試合放送の視聴率がよく話題になりますが、今回の「パブリック(ペイ・パー)ビューイン

グ」などを見ると、今大会の日本戦など、1人で試合を見ていらした方は意外に少ないのではないかと感じています。街中でたまたま、店の軒先のテレビでみんなと一緒に観戦している方などもたくさんいらっしゃるわけですから、「ワールドカップにおける視聴率って一体何なのだろう」という気がしています。視聴率というのは、テレビを見ている人の数を割り出しているわけですが、その数字が必ずしも正しくないのではないかと、実際はもっとたくさんの方が試合を見ていたのではないかと、という気がしています。

そういった意味で、「視聴率は必ずしもワールドカップの評価の基準としては正しくない」と思うようになりました。なぜそのように考えるかという、いわゆるマーケティングやスポンサーとワールドカップとの関係のことを考えるからです。スポンサーは、ワールドカップを通じてより多くの人に対して自社の製品やイメージを露出することによって、その対価としてスポンサー料を支払うわけです。その目安のひとつとなるのが視聴率なのですが、私は、視聴率としてはじき出された数字よりも、実際には多くの方が試合を見ていたのではないかと考えています。

2002年大会は終わりましたが、高騰した放映権料は今後のワールドカップでも大きな問題となるでしょう。今大会はフランス大会に比べて大幅に放映権料が高騰したことによって、NHKと民放を含めた「ジャパン・コンソーシアム」が40試合ほどの放映権しか購入できませんでした。一方で、スカイパーフェクTVは全64試合の放映して、彼らのプロモーションに活かしていました。2006年ワールドカップを日本からテレビ観戦する場合、一体どのような形で試合を観戦することになるのか。これまでのように、普通にテレビのスイッチをつけて、「さあ、サッカーを観よう！」というような簡単な気持ちでワールドカップを見ることができるのか、とても不安な先行きを感じています。

ボランティアによってできた新たな人間関係

次に、茨城会場における「ボランティアの参加者」についてです。これは茨城会場に限定した話です。

大会開始前、ボランティアについてはたくさんお問い合わせがありました。また、実際に仕事が動き出してから事務局側が適切な対応をできなかったため

に、ボランティアの方から「何をやっているのだ」という不満の声が多く上がりました。

例えば、チームのスケジュールなどは監督の気持ち一つで簡単に変わってしまいます。例えばイタリアのトラパットーニ監督などは、30分前に言ったことがいとも簡単に変更されることもありました。こんな状況なので、ボランティアの方に電話をして「明日は8時に集合してください」と言った直後に「7時に集合してください」と言い直し、その30分後にまた訂正。そのようなことが、平気で起こりました。事務局としても「最終的に本当にそれで決まりなの？ 間違いはない？」と、チーム側から「間違いのない最終結論」をもらわないと、何度も訂正をしてボランティアの方も戸惑ってしまいました。大会前に、ボランティアの方が欲しいタイミングで情報を伝えられなかったことには、ジレンマを感じました。

日本人の感覚としては、「早くスケジュールを決めて提出してくれよ」と思うわけですが、代表チームを預かる監督としては、最後の最後まで見極めて物事を決めたいという考えがあります。何故なら、勝たなければ責任者がクビになるシビアな世界です。自分の生活や人生が賭かっているわけです。「自分のいうことを聞かなかつたら世界一になれないのだ」ということを監督が協会側に言いますから、協会側もその一言に何も言い返せないのが、渋々受け入れざるを得ないわけです。だから、チームと我々とのつなぎ役になっている人は「申し訳ない」と言ってくれるのですが、それにしてもスケジュールが簡単に変わることが多かったです。

ボランティアの人たちにも良い準備、良い体制で臨みたいというモチベーションは非常に高かったことは、とてもありがたかったのですが、その裏側にはこういう難しい部分があるわけです。茨城会場には1,300人のボランティア登録されたの方がおられたのですが、そのすべての方々に現状を説明することは物理的にも不可能ですから、本当に苦勞をしました。特にボランティアのシフトを決める人は、毎日どうしようか悩んでいました。

茨城での試合は、6月2日、5日、8日の1週間という短期間で終わってしまいました。大会が始まる前、ボランティアの事務局の人が考えていたことは、

「大会終了後も大会前と同じくらいのたくさんのクレームがくるのだろうか…」ということでした。しかし、本当に拍子抜けするぐらい、大会終了後はクレームが来ませんでした。私も本当に不思議に思ったほどでした。

また、ボランティア参加者の辞退も少なかったです。これはボランティアの方々の意識の高さと、前述した1週間という短期間で試合が行われたということが、こういう効果を生み出したのではないかと個人的には思っています。また日本戦がなかったこともプラスだったのではないかと思っています。やはり、自分も日本人ですから、日本でワールドカップが開かれ、自分の会場で日本代表の試合があったら、そわそわしない方がおかしいと思います。そのような環境下で、ボランティアの方に「平常心で仕事をしてくれ」というのは、かなり厳しい注文かも知れませんが、厳しくても仕事はきちんとやってもらわないといけないのですが、例えば会場のスタンドで雑踏整理をするとき、「選手がプレーをしているグラウンドを絶対に見てはいけませんよ」と言っても、観客が歓声を上げれば、ついついグラウンドを見てしまいます。ボランティアの方が上手く仕事できたというのは、日本戦がなかったから仕事に集中できたという点が、大きなプラスになった理由だと思っています。

事務局にとって嬉しいのは、大会後にもボランティアの仲間同士でグループを作って様々な活動をしたり、サッカーの試合観戦をするなど、大会後も仲間付き合いをしている方々がいらっしゃる事です。ワールドカップをきっかけにして、新しい人間関係が生まれたということは、事務局にとっても嬉しい話です。こうした関係が長く続けば、本当に仕事をして良かったと思えます。

大会から得た経験を今後どう生かしていくか

この会場の中で、茨城会場に来られた方がいらっしゃいますか？（参加者の半数以上が拳手した）結構多くの方がいらっしゃいましたね。これだけの方がいらっしゃったとは想像していませんでした。

茨城会場は、スタジアムの周辺で参加型のイベントを行いました。また、飲食のブースも数多く設けました。茨城会場は、いつも鹿島アントラーズがカシマス

スタジアムを使っていることもあり、スタジアム周辺の売店などはJリーグ開催時も営業をしています。そのお店にとっては、通常Jリーグで年間15試合ホームゲームがあるとすれば、そこにワールドカップの3試合が追加され、儲けるチャンスが3回増えたわけです。ワールドカップの為に特別に出店したのではなく、通常の営業日数が3回増えるという有利な状況で、お客様には楽しんで頂く“場”を提供することが出来ました。試合慣れしていることもあり、ワールドカップであっても、割とスムーズに運営できましたし、スタジアム周辺のインフラ環境ができて上がっていたこともあって、来場者の方には好評だったと聞きました。

また、スタジアムの海岸側に宿泊自由のプレハブ宿泊施設を設けました。ここは、クロアチアのサポーターに利用してもらいました。はじめ、クロアチア語を話せる人は皆無で不安でしたが、英語ができるボランティアの方がいらっしゃったので、身振り手振りでコミュニケーションを取ってもらいました。

2001年コンフェデレーションズカップの際には道路のインフラが整備されていませんでしたが、この1年で予定通り整備も完了し、コンフェデレーションズカップ時の反省を自治体が生かし、輸送交通手段のプランを練って頂きました。

茨城会場に来られた方からは「それなりに楽しかったよ」、「渋滞はなかったよ」と聞きました。プレーをしてくれたチームのレベルが高く、良い試合をしてくれたことが最も重要だったわけですが、試合会場の外でも良い場を提供できたことは、運営に関わった1人としてもとても嬉しく思っています。

私は、1990年イタリア大会で初めて生でワールドカップというものを観戦しました。ちょうど日本がワールドカップに立候補する話が持ち上がった頃です。当時、試合観戦するためにイタリア国内を電車で移動をしていた時、車窓から数多くのサッカーゴールやグラウンドが見えました。こういう国だからこそ、ワールドカップを開催する権利があるのであって、その当時の日本のことを思うと、正直な気持ちとして「本当に開催していいのかな？」と感じていました。94年アメリカ大会の時には、日本は正式にワールドカップ開催国として立候補をしていました。シカゴでの開幕戦前、FIFA総会の会場へ行って手伝いをし、5～6会場を

見て回りました。

この時には、日本ではJリーグがスタートしていたので、アメリカ大会の運営を見た限りでは「これなら私たちにもできるかな」という印象を受けました。4年前とはかなり状況が変わってきたわけです。そして98年のフランス大会の時には、日韓の共催が決まっていました。フランス大会を現場で実感したとき、「もう4年後は自分たちの番だ。どんなことが4年後にできるだろうか」という具体的な意識を持ちました。

今回の大会で、それぞれの人が観客として会場を訪れて感じたことを持ち帰ってほしい、「楽しかったね。また2006年に会いましょう」という気持ちを持って、家に帰って欲しいと心から思いました。

私たちにとって日本でワールドカップを開催するということは夢のような話だったわけです。その夢の話が現実になって、そして終わりました。日本もベスト16まで進出しました。次はもっと上を狙えるほど強くなりました。2006年には、開催国を経験した国としてドイツに足を運んで「日本の方が良かったよ」あるいは

「ドイツの素晴らしい点」などを探せればなと思い、最近貯金を始めました。嫁さんがそれを許可してくれるかどうかは分からないわけですが。

今大会、たくさんのチームの方と接する機会を頂きました。また、ボランティアの方やFIFA、メディアの方とも新しい人間関係を築くことができました。この大会で、私は本当に大きな財産を得ることができました。しかし、私自身がこれだけの財産をただ蓄えていても仕方ありません。このような場で話をさせて頂くだけではなく、次の2006年、あるいは次にいつ日本にワールドカップが来ることになるかは分かりませんが、その時の役に立てればと思っております。そのためにも皆様とも様々なディスカッションを続けて行き、また今回のような楽しい1カ月間を味わいたいと思っています。

以上、とりとめのない話で申し訳ありませんでしたが、後のディスカッションの時間に皆さんと意見交換ができればと思っています。長々と話をして申し訳ありませんでした。ご静聴ありがとうございました。

中塚 どうもありがとうございました。ワールドカップの最前線で活躍なさっていた長岡さんですが、持ち時間30分の倍の時間を使ってプレゼンして頂きましたが(笑)、それでも話し足りないことが山のようにあると思います。また後ほど補足して頂きたいと思います。

それでは次は、やはり開催ベニューの運営に携わっておられました村林さんです。元々の所属は「FC 東京」ですが、宮城県のベニューコーディネーターとしてご活躍されました。それでは、村林さんです。

「ベニューコーディネーターからみたワールドカップ」

村林 裕 (宮城会場ベニューコーディネーター / FC東京)

ベニューコーディネーターとして向き合ったワールドカップ

「ベニュー」という言葉は、今回のワールドカップでよく使われる言葉でしたが、私は最初に聞いた時には意味が分からず、英和辞書を引きました。「開催地」という意味です。今回のワールドカップでは10会場(韓国を入れると20会場)のことを言います。

各ベニューの総責任者は「ゼネラルコーディネーター」と呼ばれる人で、FIFAから任命されて各ベニューに配置されます。

「ベニューコーディネーター」とは、各ベニューのJFA

WOC側の責任者を指します。これらの下に組織された宮城ベニューのスタッフたちは、開幕直前から仙台のメトロポリタンホテルの8階フロアを借り切って、その中にゼネラルコーディネーターのオフィスがあり、FIFAの「デレゲーション(代表団)」と称する人達が各部屋をオフィスとしました。このホテルの8Fが宮城ベニューのヘッドクォーター(本部)となったわけです。

ワールドカップの経験を今後はどう活かすか

今回、日本には10人のベニューコーディネーターがいたわけですが、いわゆる地元の方が配置された

のは4カ所(静岡、茨城、埼玉、神戸)でした。宮城へは私が、大分へは広島の方が、札幌と新潟にはJリーグの方が、そして大阪と横浜には日本サッカー協会から派遣されました。

私は宮城ベニューの日本側の責任者として、宮城におけるすべてのこと、つまりお誉めも、お叱りも受ける立場でした。5月13日に宮城に赴任したとき、6月の試合が終わるまでは東京に戻ることを考えず、精一杯やってみようと思いました。東京生まれ東京育ちの自分が、初めて宮城の方々と一緒にすることになったのです。宮城の方々は、本当に実直な辛抱強い性格で、東京の人とだいぶ違うということ強く感じた1カ月間でした。私という人間を素直に受け入れてくれて、1カ月間ほとんど揉め事も起きず、何かトラブルが起きてもひたすら辛抱強く対処してくれました。私が県外から来たということをさほど意識せず、大会が終わった今でも「よそ者が行って何かしてきた」という感じを持たずに過ごすことができたのは宮城の方々のご協力のおかげです。仕事をする上でやりづらかったとか、人間関係で大変だったということはありませんでした。

今回のワールドカップのベニューに課せられた重要なテーマは、ワールドカップ終了後、地域がそのスタジアムをどのように利用するか、あるいは地域のサッカー協会や地域の方々がワールドカップ終了後にその経験をどう活かすかということです。

しかし、ベニューコーディネーターをその地域の人担当するかどうか、このテーマに直接影響を及ぼすことはないと感じています。宮城ベニューの場合、ベニューコーディネーターの私が県外の人間だったということは問題ではありません。宮城の課題とは、この宮城の方々、宮城県サッカー協会、自治体の方が、このワールドカップというものにどう取り組んだのか、あるいはワールドカップ後にその経験をどのように活かしているのか、ということです。これに関しては、色々な面で「これでよかったのかな?」という疑問を今でも持っています。

スタジアムの収入源の第1位は“コンサート”

ご存じの通り、「宮城スタジアムの今後はどうする

のか」という大きなテーマがあります。漏れ聞くとこによれば、「壊した方がよいのではないか」という意見と、「スタジアムをどのように活かすか議論すべきだ」という両論があるそうです。あのアクセスの悪さを考えると、スタジアム経営としてはたいへん厳しいと思います。

私の所属するFC東京は東京スタジアムをホームスタジアムとして使用しています。東京スタジアムの年間収入は約8億円です。そのうちの2億円は「コンサート」による収入です。スタジアムの方は、優先順位としてはJリーグが1番と言ってくれますし、そうでなければ我々は困るのですが、しかし、スタジアムの収入の1位はコンサートで、これはJリーグからの収入の約2倍に当たるのです。つまり現実には、コンサートが行われないと、スタジアム経営というのは困難なのです。

では、宮城スタジアムで本当にコンサートができるのか、ということが問題です。9月にSMAPがコンサートを行うそうで、なかなか宮城も頑張っているなと思います。しかし、宮城スタジアムでは大変だろうなと感じることもいくつかあります。コンサートなどでスタジアムを利用するとき、芝生の上に「テラプレス」という通気性のあるプラスチックボードを敷き詰めますが、宮城はこれを東京スタジアムから借りるそうです。これは1枚当たり結構な金額でして、東京スタジアムはこれを何回か貸し出すと、購入金額を回収できるそうです。東京スタジアムは、京王線の飛田給駅から徒歩5分、約500メートルでスタジアムに着きますので、警備は比較的楽です。ところが、宮城スタジアムは最寄り駅から徒歩で45分というスタジアムですので、その警備のために膨大な費用を必要とするはずで

また、東京スタジアムの音響はとても良いと、アーティストの方々の評価が高いそうですが、宮城スタジアムの音響は相当しんどいのではと感じています。とりこし苦労であればよいのですが、宮城スタジアムのデザインは特に海外の方々から素晴らしい評価を受けているようで、“伊達政宗の兜”をモチーフにしたデザインは、まさに外国人受けします。ほとんどのスタジアムが、左右対称にできているのですが、宮城スタジアムは、このデザインのために左右対称ではあ

りません。これは、建築デザイン的には高い評価のようですが、音響を考えたときに左右対称でない会場というのは、本当に平気なのかなと思います。こうしたいろいろな面から、アーティスト側がどこまで宮城スタジアムを選ぶのかと考えると、これは宮城の方々と議論をしたわけではありませんが、東京スタジアムと比較した場合、今後の経営は相当大変だろうと感じます。

「試合が終わったから帰ってくれ」では、ワールドカップではない

では、ワールドカップの試合に話を移しましょう。宮城スタジアムは、3試合が行われました。初戦はメキシコ対エクアドル。エクアドルという国をさほど知らなかった私は、サポーターの数は少ないだろうと考えていましたところ、実際はエクアドル人が非常に多かったのです。日本とエクアドルは、交流の歴史が古く、かつ深いということを知りました。

メキシコについては、宮城の前に試合のあった新潟のスタッフから、「メキシコ人は試合が終わっても帰らないよ」と聞いていました。楽器を持ってきていつまでも踊っているということでした。試合終了後にスタジアム内または周辺で、サポーターが歌って踊って騒いでいるのを、「時間だから帰りなさい」「シャトルバスが無くなりますよ」、また本音でズバリと「あなた方が帰らないと、いつまでもスタッフが帰れません」と言うのか、それとも「お好きな時間までどうぞ」と許すのか…。警備の側からすると、時間給で100人単位のスタッフを雇っていて、それが1,000~2,000人はいますから、騒いでいるサポーターが帰らないことが理由で警備が解けないとすれば、予算の問題を考えると、やはり帰って欲しいと考えざるを得ません。しかし、楽しそうに踊っているサポーターたちに「帰りなさい」と言うのが果たしてワールドカップなのか、と心の中で自問自答しました。

結果として、多くの日本人ファンもメキシコサポーターのダンスを囲んで一緒に楽しみ、帰路のバス待ちの時間が過ぎていくうちに、自然に解散して帰っていく流れができました。大きな問題はなかったのですが、もし心配したような場面になったときは、どうすべ

きだったのでしょうか。

カニーヒャに体を張って「ストップ！」

2試合目は、スウェーデン対アルゼンチン戦でした。アルゼンチンサポーターの数はとても少なかったです。現在の経済状況が原因なのでしょう。実際には、水色のレプリカユニホームを着ている人はたくさんいましたが、たくさん日本人がアルゼンチンサポーターになった結果でした。

優勝候補筆頭のチームが1次リーグ敗退という結果になって、アルゼンチン人が本当に寂しそうな顔、悲しみに打ちひしがれた雰囲気醸し出していたのが印象的でした。彼らの沈痛な表情は今でも忘れられません。

この試合で、ベンチにいたカニーヒャが暴言を吐いて退場になるという事件が起きました。その時に、隣にいたトレーナーが「自分が暴言を吐いたのだ」と審判にアピールをして退席しようとしたのですが、審判はトレーナーではなくてカニーヒャを退場処分しました。選手は退場になると次の試合にも出られなくなるため、トレーナーやスタッフが身代わりになると、瞬間的に判断したようです。慣れているのか、あるいは彼らの本能なのでしょう。これは、前半が終わる少し前の出来事でした。カニーヒャは、退場してロッカールームに下がるとうしました。今回のワールドカップでは、ドーピング検査(コントロール)を試合終了後に1チーム2人行いますが、誰にするのかは抽選で決まります。前半が終わるまで誰がドーピング検査を受けるか分からないため、カニーヒャをドーピング室に待機させなければなりません。それを、第4審判が私に指示をするのですが、当然カニーヒャにはスペイン語以外通じるわけがありません。そこには通訳もいません。訳の分からないまま、ロッカーに行かないように「ストップ！」と言いながら体を張って止めた、ということがありました。

悔しかった「空席問題」

宮城の最後の試合が、日本対トルコ戦でした。「日本をHグループ1位で宮城に引っ張ってきたのは運が良かったな」と言われましたが、日本が敗れた

後は、「おまえの運もそこまでか」「日本を負け終わりにして、どう責任を取るんだ」などと仲間に冗談を言われました。日本戦をやったということで、それなりに思い出もたくさんあります。

ただし、あの空席問題だけは、怒りと同時に悔しい思いをしました。キックオフ1時間前に、バックスタンドの前方の空き加減がおかしいと感じました。バックスタンドの上の方は雨でも濡れないエリアですが、下の方は濡れるので試合前は人が座っていないのは当然でした。ただし、その空き方がおかしい。キックオフの30分前に「この空き方はおかしい」と本部に連絡をして、空いている席がどういう種類の席なのか調べてもらいました。そして、パイロム社が販売すべきチケットであるということが分かりました。この試合の90分間は、試合の内容と同時に、この空席に対する憤りと悔しさをマスコミに対してどう答えようか、また県知事にどのようにコメントしてもらおうかということ考えた90分間でした。

パイロム社やFIFAがコメントしたところでは、「見切り席のインプットミスだ」とのことでした。もう、どうにもならないミスです。しかし、宮城では、この試合が3試合目なのです。1試合目にミスを犯すなら分かりますが、3試合目とは納得がいきません。パイロム社が試合直前に売ったのは200席です。実際には900席持っていて、700席を売らずに持っていたというのが、あのトルコ対日本戦の空席問題でした。宮城の方々が2年間にわたり一生懸命準備をした甲斐もなく、彼らのコントロール不可能なところであるような問題が起きたのです。宮城の方々の悔しさを感じると、自分も怒りのやり場がないと感じています。

チームを挙げて、ワールドカップに触れ合う

さて、今回の代表チームにはFC東京からは残念ながら代表選手が出ませんでした。フロントサイドはどうしようかと考え、5月31日から6月13日までは事務所を閉じて、電話が掛かってきても留守番電

話で対応して、スタッフ全員でワールドカップに行こうということになりました。我々にとっては最初で最後の（日本で開催される）ワールドカップなのだから、みんなでワールドカップに参加しよう、世界のサッカーファンと触れ合おうということになりました。その結果、14人が長期出向しました。

浦和レッズの佐藤さんという埼玉のベニューコーディネーターが、「スタッフ全員がワールドカップに携わったので、多分ウチが一番多いよ」とおっしゃいました。「何人ですか？」と伺ったところ、「12人です」との返事でした。そこで、「へへへ、FC東京は14人です」と自慢しましたが、FC東京と浦和レッズは同様の考えをもっていただようです。今回のワールドカップにみんな触れることが出来たのは、何はともあれ楽しい思い出でした。

「ガンバレ！宮城」、「ガンバレ！新潟」

今日この立場で、宮城の具体的な課題を申し上げるのは決して良いこととは思いません。スタジアムの経営とかスタジアムの今後というのは、色々な意味での課題がありますから、今後宮城の人達がきちんとそれらをクリアすべく努力することが重要であると考えます。

新潟のことについて少々触れます。ワールドカップ終了後、Jリーグでは3万人を超える観客で非常に盛り上がっているようです。新潟ベニューの多くの方々が、ワールドカップ後の課題、取り組みを考えているとおっしゃっていました。その成果が出ているように感じます。

「ガンバレ！宮城」「ガンバレ！新潟」と両ベニュー、自治体、サッカー協会そしてベガルタ、アルビレックスにエールを送りたいと思います。特にJリーグの各クラブがどんどん社会的な意味を持ちながら運営していくということが、我々の使命であると感じており、ベガルタ、アルビレックスの両クラブには、このほか地域のために健闘をお祈りします。

中塚 ありがとうございました。先程の鹿島の話と重なるところ、地域に特有のテーマもいろいろとあると思います。後ほど、後半のディスカッションで取り上げて行きたいと思います。

3番目の講演者の方は、宮城島さんです。今度は少しテーマが異なりまして、これまでは試合を開催した自治体の話でしたが、今度はキャンプ地としてロシアを受け入れたお立場から、コメントを頂きます。では、よろしくお願致します。

キャンプ地からみたワールドカップ

宮城島 清也(清水市ワールドカップ推進本部 清水サッカー協会・常任理事)

皆さん、こんにちは。清水市から参りました宮城島と申します。「清水市から」とご挨拶できるのもあとわずかで、今、清水市では2003年4月に静岡市と合併するための準備が進んでいます。ワールドカップが終わってから1カ月ほどが経ち、皆さん、祭りの後の寂しい気分かとも思います。私も市の職員として、やっと職場復帰できたという状況です。

清水市は日本代表の招致をもくろんでいた

清水市はロシアチームのベースキャンプを受け入れましたが、初めに、ロシアに決まった経緯をお話します。

2001年の夏、この会の主催であるサロン2002のメンバーの方々が“出張サロン2002”としてキャンプ施設となりました清水ナショナルトレーニングセンターに来られました。この施設は、普通の市民からトップアスリートまでが使えるトレーニング施設として清水市が昔から作りたかった施設でしたが、ワールドカップが開催されるということで、それに合わせて作るようになりました。オープンは2001年4月です。

当初は、日本代表チームの招致をもくろんでいましたが、日本はヤマハの葛城北の丸に合宿地を決めたので、他の外国チームに来て頂くということになりました。2001年11月の初めのことです。私は、その方針が出されてから、日本サッカー協会理事で清水市役所職員としてベースキャンプを担当している綾部美知枝さんのもとで、特別にその任に当たることになりました。今考えれば、日本代表はロシア以上にメディアへの露出や市民との交流が無く、磐田市が作った練習場は一回も使わなかったので、ロシアの方がむしろ良かったかもしれません。

飛行場のない清水市はアクセス面で不利に

その頃から、ベースキャンプ地の誘致合戦が始まりました。本来なら、「誘致合戦」という言葉はおかしいのですが、とにかくそういう状況でした。日本国内の開催地は大都市を中心に、国内に均等に散らばっているのが特徴でした。釜山で行われたファイナルドロー(本大会抽選会、2001年12月1日)の頃、各出場チームは開催地間の移動を飛行機で考えていました。日本人は便数やダイヤの正確性から考え、新幹線での移動を考えるとありますが、外国のチームは飛行機でないと嫌だと考えていたのです。あいにく清水の近くには飛行場がないので、苦戦することになりました。ファイナルドローの頃には、アルゼンチンと交渉していました。アルゼンチンは我々の施設を気に入った様子でしたが、アクセス面で気に入らないようでした。釜山には市長と綾部さんをはじめとしたメンバーが入っていて、私は他のスタッフと一緒にトレセンの特設事務所で待機していました。あの日は深夜の2時頃まで市長から国際電話がかかってきて、自衛隊の浜松基地が使えないかとか、浜松基地に降りることが出来る機体にはどんなものがあるかとか、緊迫した声で聞かれるのです。10年前なら「そんなこと、夜中に突然言われても調べようがない」の一言で済んだのですが、今はインターネットで調べると浜松基地の飛行場の長さが分かるのは当然で、マニアックな人が飛行機の種類だの、助走距離などをホームページに載せていて、全部分かってしまうのです。調べて釜山に答えると、また、次の質問がとんでくる。いい加減にしたらどうか、とも思いました。

「東海道シリーズ」を戦うH3に照準を絞る

アルゼンチンは結局、北の方の試合会場が多いF組に入ってしまったので福島県の「ヴィレッジ」を選びました。面白いことに、私がこの任に当たる前にアルゼンチンが視察に来たとき、F組の会場とのアクセスをとても気にしていたということです。抽選会の前とはいっても、第1シードの南米チームが、F組またはC組に分かれるだろうということは予想されないこともなかったのですが、日本代表スポンサーのアディダス社をスポンサーとするアルゼンチンが日本ブロックのF組に入り、韓国代表スポンサーのナイキ社をスポンサーとするブラジルが韓国ブロックのC組に入ったのは偶然か、とスタッフの間で色々推測したものです。ちなみに、12月4日にアルゼンチンの最後の視察が入った時には、ほぼ「お詫び」視察ということが分かっていたので、切ない思いで受け入れました。地元のマスコミを中心に大勢が集まったので、他のキャンプ地のように子どもたちを並べてお迎えということも考えたのですが、最終的にがっかりすることが分かっていたので、この時は止めました。

その一方で、実際には利便性や金銭的理由から新幹線利用が増えるだろうということは予測されましたが、それを12月の段階でチームに理解させるのは困難でした。ですから、飛行機利用とは関係のない我々は「東海道シリーズ」と呼んでいましたが開催地が1次リーグの会場になっているH3に入ったチームに的を絞り、アプローチをかけました。H3になったチームは横浜、神戸、静岡を会場とするので東海道新幹線による移動がベストで、飛行機を使いようがありません。トーナメントに勝ち上がっても、東海道から大きく外れるのは宮城くらいで、清水を選ぶのがベストだといっても過言ではありません。

ただ、問題はH組ですから、日本と対戦するということです。しかも、そのH3に入ったのがロシアということで、内部的にもいろいろな議論が起きました。受け入れには多額の費用がかかる上、日本と対戦するチームの受け入れに市民の了解を受けられるかどうかとか、ロシアに対しては高齢者を中心にシベリア留置や北方四島返還絡みの因縁があるかどうかとか、ただでさえ金がかかるのに日本の過激サポー

ター対策や右翼対策のために警備費がかさむが良いかどうかとか、問題は色々ありました。私は個人的には、激しい誘致合戦の元になった「何が何でも誘致」ということにこだわらず、「サッカーのまち清水」としては、別の関わり方もあるのではないかと提案しましたし、綾部さんも私に近い立場でした。それでも、もし選ばれれば喜んで受けようということまで待っておりまして、最終的にロシアに選んで頂いたわけです。

ロシア受け入れ3つの目的

私も清水市にとって、ロシアチームをベースキャンプに受け入れる目的は3つありました。

第1は、ロシアチームが活躍できる最高の環境を提供することです。市民にとってはともかくとして、私たちスタッフにとってロシアチームは大切なお客様ですから、彼らの成功が我々の成功と言えました。ですから、相手が日本だろうが何だろうがロシアが勝つことを常に祈っていました。第2の目的は、トップレベルのスポーツを通じた国際交流とスポーツ振興でした。これは、具体的には少年サッカー教室などの交流イベントになります。第3の目的は、ワールドカップを機とした地域の活性化・経済振興でした。これら3つの目的が果たされたかどうか、ということが今日の私の話の中心となります。

ロシアの練習はほとんどが非公開に

第1のロシアチームの成功については、達成できなかったと言えられるかもしれませんが、何しろ1次リーグ敗退ですから。

他のキャンプ地では公開練習が多く行われていたようですが、ロシアの練習はほとんど公開されませんでした。エスパルスとの公開マッチがあった程度です。実は、ロシアは、日本と対戦するということで情報漏れに非常に神経を使っていました。トレセンは日本代表チームも使う施設なので、我々のことをスパイだと思っていたかもしれません。初日の練習の時、市長と助役がグラウンドに来て、何気なく練習を見に行ったところ、すぐに止められ、練習を見るなど言われました。市長と助役だと説明すると「わかった。10分だけ許そう。それも市長だけだ」とのことで、それ

からは我々スタッフも練習を見る機会はありませんでした。エスパルスとの公開マッチも、やる前までは、やじやら、投石やら、何をされるか分からないと不安だったようで、試合をしたら自分たちのことを応援してくれたと喜んでいました。

ロシアチームがそう思うのも当然で、5月のゴールデンウィーク中にトレセンの芝生が枯れるという事件が起きたりしたので、自分たちが歓迎されていないと思ったのでしょう。芝生事件のときは、除草剤をまかれて芝生が枯れ、一時は深刻な状況になりました。私や綾部さんはトレセンの芝生メンテナンス・スタッフが優秀なのが分かっていましたので、たぶん大丈夫だろうと、あまり心配していませんでした。実際にロシアがキャンプ入りしたときにはほぼ回復していたので、まったく問題ありませんでした。ただ、事件がゴールデンウィーク期間中ではなく、あと2週間遅かったら、修復は間に合わなかったかもしれません。また、この事件で静岡県警察が本気で立ち上がってくれて、私たちの施設の警備は万全なものになりました。場合によっては国際問題になりかねませんから、県警のメンツをかけて取り組んでくださったと思います。

右翼の問題も心配だったのですが、街宣車も来ませんでしたし、それも警察の方が頑張ってくれた結果だと思います。基本的には右翼の皆さんは、ワールドカップはめでたいことと思っていらっしゃったようで、あまり大きな問題は起きませんでした。一度、右翼団体らしい名前を名乗った電話が来て、「ロシアが来ているのなら、日本の皇室とロシアは関係があるから皇室の写真集を買ってくれ」と言われました。何の関係があるのかよく分かりませんでしたので、「いいません」との返事をしましたら、素直に電話を切ってくれました。意外に「何でロシアなのか」というクレームは、ゼロではありませんでしたが、少なかったと思います。逆にボランティアの中には、シベリア抑留を経験された方が3人おられ、ロシア語が出来るからということで積極的に参加された方もいらっしゃって、非常に良かったと思います。

試合が目的の選手達にイベントを強要できない
2番目の国際交流とスポーツ振興ですが、主な

イベントとしては、エスパルスとの公開マッチの他に、チームスタッフによる少年サッカー教室や保育所訪問、役員チームと地元のサッカー協会との交流試合などがありました。役員チームとの交流試合は他には無いイベントだったと思います。日本戦の前日に前哨戦をやり引き分けたので、後日、再試合が申し込まれ、2 - 5で負けました。市民やマスコミの皆さんからは選手が出るイベントが何も無かったじゃないかと言われましたが、彼らは試合に来ているのだからイベントに参加しないのは当たり前のことなので、我々としても、無理なお願いはしませんでした。ただ、最終戦の翌日、もう試合もなく他の予定がありませんでしたし、トレーニングも関係なくなったのでエスパルスドリームプラザへ出かけて買い物でもしようよ、と投げかけました。期間中、選手はトレセンに缶詰め状態になっていてお土産くらい買いに出かけたいという様子があり、チームスタッフも少し気持ちが動いたらしく事前チェックのために出かけたのですが、結局、選手達の外出は実現しませんでした。だから、選手たちはトレセンと試合会場の狭い空間しか知らずに母国へ帰ってしまったわけです。それが、すごく残念でした。

経済効果はほとんどなかった

第3の目的である地域の活性化、地域経済振興ですが、のぼりやバッチ、バンダナなどを作ったりして、それなりに盛り上がりました。バンダナは、サミットの時に小泉首相がプーチンさんに渡したというエピソードもおまけに付きました。これをデザインしたのは私なのですが、それを言いたくて今日実物をお持ちしました(笑)。ロシアを招致する忙しさの中で、いろいろとバタバタしまして、どこでも作っているようなグッズ品の制作をかまけていたら、上の方の人たちが色々勝手に作ってしまいました。それがあまりセンスの無いものだったので、自分たちである程度のレベルは保ちたいと思ったのですが、業者に頼むと大変です。そこで自前で作ることを提案したところ、通りまして、それがこのバンダナです。案外人気がありまして、結構盛り上がるのツールになったと思います。その他には、市内の全小学校がそれぞれ応援の千羽鶴を折っ

て、ロシアチームに贈りました。彼らはそれをすべて本国に持ち帰りました。

結果的に、経済効果はほとんどなかったと言ってよいと思います。ロシアからのサポーターはロシアサッカー協会のスポンサー関係者以外ほとんど来ませんでしたし、マスコミの皆さんも宿泊を伴って清水に滞在した方はそれほど多くなかったと思います。しかし、清水は他と違って、経済効果を前面には出していませんでした。中津江村などごく一部のキャンプ地を除いて、経済効果は無かったのではないのでしょうか。日本代表ベースキャンプの北の丸やフランス代表の指宿の岩崎ホテルのように、自治体主導ではなくホテル主導で収益を狙って誘致したところは、ホテル自体はトータルで儲かったかもしれませんが、そもそも、市レベルで経済効果を測定すること自体が意味の無いことなので、そんなことは考えるだけ無駄だと思います。

直前まで決まらないスケジュール

そんな中で、今ひとつ市民の盛り上がりにつながりにくかった事情があります。それは、イベントなどの日程が直前にならないと決まらないということです。少年サッカー教室は6月2日の日曜日に行われましたが、実は前日の朝「今日、やろう」と言われたのです。やることだけは前もって決まっていたのですが、日は決まらず、突然、そう言われたのです。参加者の都合もありますので「ちょっとそれは無理です」と答えまして、翌日にやりましょう、ということになったのです。あらかじめ日程が決まっていれば、参加チームを募って抽選で決めると全体としても盛り上がるのですが、時間的余裕が無く、1本釣りでも都合をつけて実施しました。参加したチームは喜びましたが、それ以外のチームに広がるようなイベントにはなりません。

また、ロシアサッカー協会から、神戸での初戦のチュニジア戦のチケットを清水市に贈呈する申し出がありました。これも試合前日の朝、突然 500 枚贈呈の申し出があり、午後3時頃に市役所に届けられたのですが、この処理にも困りました。試合前日、しかも神戸での試合で、受け取ってみたら 500

枚以上あって、誰に、どうやって配ったらよいのか悩みました。市の幹部の中には、内輪で配ってしまおうと甘く考えた人もいたようです。しかし、私は、2月に日本平で行われた代表紅白戦や、ロシアとエスパルスの公開マッチのチケットで「ワールドカップの魔力」を思い知らされていたので、市民に配りましょうと主張し、綾部さんや他のスタッフと協力して一般配布することにしました。それを聞きつけた市の職員が先着順の列の初めに並ぶという失態もありましたが、何とか無事にチケットを配ることができました。私たちの意見が通ったのは、たまたま、市の幹部の出張が重なり、私が実質的な責任者になったことが大きな理由ですが、職員の失態に対して市民の皆さんから寄せられた批判の大きさを考えると、内輪で配るなんてことをしなくて本当に良かったとつくづく思います。その分、内輪で配りたかった人には非常に恨まれて、後々、個人的には大変でした。

午前中にロシア側から申し出があり、お昼過ぎにコミュニティーFMの「FMしみず マリンパル」で「午後4時から1人につき2枚まで先着順で配ります」とアナウンスしました。それしか広報していないのに配布開始時刻には100人以上の方が並んでいました。4時から6時まで配布する予定でしたが、枚数も多かったこともあって、6時少し前に最後の1枚を配り終えました。そのとき初めて、総数が741枚だったことが分かったのです。「もっと告知をしっかりすべきだ」「事前に分かっていたんだろう」「清水がもらったのに何で神戸サッカー協会に渡すんだ」「行かないでチケットを記念にしている人もいる。本当に行く人に配るべきだ」など、色々と言われましたが、たった1日しかない中で、今回のやり方はベストだったと思います。

チケットのプラチナ化を実感

最後に私がこのキャンプから得たことについてお話しします。

1つは、ワールドカップの魔力についてです。本大会のチケットについての過熱ぶりは皆さんご存じの通りですが、2月の日本平の日本代表紅白戦やロシア対エスパルス戦のチケットもプラチナチケットと化しました。両者ともあつという間になくなって、チケットを

ゲットできなかった方から恨み節やら脅迫やら、色々な電話がかかってきました。チケットの発売開始日の前後2日間は電話が鳴りっぱなしでした。特に、日本代表の紅白戦の時は電話が途切れなくかかってきて、電話を終え受話器を置くとまたすぐにかかってくる、それがずっと続いている状態でした。内容も激しいもので、「訴えてやる」という電話もあり、事務局のスタッフも殺気立って大変でした。日本代表の紅白戦は私が運営を担当したので、当日チケットを出せと言われても出さず、トラブルはありませんでした。

ロシア対エスパルス戦は、私が日本代表の紅白戦で厳しくチケットを管理したので担当を外されてしまい、別の人気が持ちよばらまきました。実は、お客様がスタジアムの収容能力を超えて来場されたということで、もう少しで明石の花火大会事故の二の舞になる危険な状況でした。その対応に追われたため、私はほとんど試合を観ていません。それを含め、本大会についても「おまえは仕事柄、チケットを持っているだろう」と言われることが多く、自力でとったチケットも勘ぐられるのが嫌なので人に譲り、今大会は結局1試合も見ませんでした。唯一、ベルギー対ロシア戦(エコパ)は、チームのスタッフを車に乗せて会場まで行きました。ただ、運転手のADカードしか持っていないのでトイレにも行けないような状態で、スタンド下の駐車場で歓声だけを聞いていました。1回目の歓声を聞いたとき、得点が決まったのかと思いましたが、これは同時刻に行われていた日本対チュニジア戦の1点目によるもので、エコパのスタンドは揺れていました。そんなに大勢がラジオを聞いていたのか、と不思議に感じたものです。

決まった時点ですぐに対応するのがプロの仕事

2番目は、主に国際交流についての考え方のギャップです。先程の飛行機と新幹線の例もそうなのですが、根本的な価値観の違いを短期間で埋めるのは非常に難しいことです。特に担当者が困るのは、先程もイベントの時間が直前にならないと決まらないということを申し上げた通り、「日本時間と世界時間の違い」があったことです。我々現場レベルでは、早い時点で相手に合わせることを覚えたので、ロシ

アチームに混乱させられることはありませんでした。他のキャンプ地では、チームがキャンセルして困ったという記事がよく出ていました。全部が全部ではないと思いますが、チームのことを考えずに、特に監督の方針や事情を考えずに、自治体と代理人が大使館あたりと勝手に決めた予定が、その通りに運ぶはずがない、というのが現場の感覚です。私たちは、「あらかじめ決まらないものは決まらないのだから、決まった時点ですぐに対応するのがプロ」と考えていました。だから、前日や当日に色々なことが決まっても、準備や対応は大変ですが、「困る」という状況とは少し違っていました。

そのような状況下で、場合によっては「出来ないものは出来ない」とハッキリした態度をとりましたが、そこはやはり「サッカーのまち」ですから、サッカーのことにに関して出来なかったことは少なかったと思います。そうすると困るのは、その事情の分からない人たちへの説明です。市の幹部やマスコミの人たちは、情報を早く欲しいので私たちを急かします。大体、毎日1度は電話をかけてきて情報を聞き出そうとします。事務局では、「分らないものは分らない」「決まっていないものは決まっていない」という対応をしました。「決まりつつある」とか「こういう話もある」ということは言いません。なぜかというと、それが決まったように報道されたり、スケジュールに組み込まれたりするからです。スケジュールは勝手に決められないので「イエスカノーか」で答えました。そうすると市の幹部やマスコミの人たちは面白くないのでプレッシャーをかけてきます。私や綾部さんは、そんなプレッシャーは屁でもありませんが、他のスタッフの中には悩んだ人もいたようです。また、マスコミの皆さんも、市長や自治体の担当者が困ってオロオロするところを撮りたいと思っているので「それじゃお困りでしょう」と、まるで誘導尋問のように聞いてくるようなこともありました。しかし、私は「いえ、困っていません」と答えるので、面白くなかったと思います。本当に困っていないものですから、仕方がないのですが、困っているのは、日本人が相手に合わせようとしないうということ。私たちは、市の幹部やマスコミなどの、同じ日本人に対して困っていたわけです。

パブリック・ビューイングを敢行

次にパブリック・ビューイングについてお話しします。当初、「会場はベニューごとに何か所」と決まっています。JAWOCの努力のおかげでキャンプ地についても条件付きながら、キャンプをしているチームのみパブリック・ビューイングを行ってもよいということになりました。その通知のファックスを受け取ったのは、5月17日金曜日の夜7時で、もう大会は間近でした。週明けの22日に説明の会議が東京で開かれるということで、パブリック・ビューイングが可能になったことに対する感謝の気持ちと同時に、今頃決まっても困る、という両方の気持ちを併せ持ったキャンプ地が多かったのではないかと思います。

実際に、時間的な問題、予算的な問題、場所の問題、そしてスカパーが放映権を持っているので、キャンプ地を運営している自治体はその映像を使ってパブリック・ビューイングを実施出来ないという事情があり、断念したキャンプ地が多かったと思います。ただ、清水はやるうということになりました。そういう難しい背景があっても、清水は日本戦でパブリック・ビューイングをやり、600人が入りました。それ以外のロシア戦絡みは、20人から30人くらいしか入りませんでした。日本戦については、もし事前に広報がきちんとできていれば、もっと入ったのではないかと思います。その日本戦でも、我々はキャンプ地としてロシアを応援するパブリック・ビューイングを行ったのですが、会場でロシアを応援したのは、我々スタッフ以外にはロシア人が数人しかいなかったかもしれません。ロシアキャンプを手伝うボランティアの中にも、日本が勝って喜んでいて人が何人かいました。

白黒ハッキリしないものは独自の判断で

最後に、茨城ベニューの長岡茂さんのお話の中に、「約束は約束で、守るのは当然」という指摘がありました。我々キャンプ地としては、「約束は約束で守るのは当然としても、守られる約束でないという意味がない」、つまり、守られると約束できない、予想できない約束が多かったと思われます。例えば、ワールドカップの名称の表示が出来ない問題に関しては、ガイドラインが無く、どこまでやってよいのかがサッパリ

分らない。我々が達した結論は、「白か黒か、はっきりさせようとするとなぜか全部が黒になってしまうので、灰色のものは灰色のままやっておこう」というものでした。セキュリティーなどには当然配慮をしますが、それ以外の影響の少ないものに関しては、時間もかかってしまいますから、事務局でいちいち確認をしませんでした。そういった点が、開催地とキャンプ地の違いと言えると思います。

中塚 ありがとうございます。開催地の話はいろいろと耳に入ってくるのですが、キャンプ地の話は中津江村以外は一般に耳に届くことはなかったと思います(笑)。今の様な話はおそらく、他にも山ほどあるのではないかと思います。

この総括シンポジウムの目的は、最初に申しましたとおり、結論を導き出したり評価を下す場ではなく、様々な物語を出し合って、共有しようということです。後半戦、時間は限られていますが、出来るだけフロアの方からも意見を出して頂いきながら、この「ささえる物語」を出来るだけ多く出して行きたいと思います。

宮城島さんが最後に言われたことに関連で言うと、今回のシンポジウムは「ワールドカップ総括シンポジウム」という、「こんな言葉を使って良いの?」という名称を使っております(笑)。それなりの関係に聞いてみたところ「言われたその時に、対処すればよいのでは」と言われまして、今回はこのような名称になっております(笑)。

では、4時5分過ぎまで休憩を取りたいと思います。その間、皆さんのお手元に「ワールドカップ総括シンポジウム参加者質問・意見表」という用紙があると思います。もう一枚「アンケート用紙」があると思いますが、アンケート用紙はお帰りの際に受付へ提出してください。この休憩時間で提出頂きたいのは「質問・意見表」の方で、何かご意見とかご感想、或いは各自の物語をお書き頂いて、中塚の方まで提出願います。では、しばらく休憩を取りたいと思います。

ディスカッション

Q. < 荒井氏 >

JAWOCは、フランス大会でのチケット問題を事前に研究されたのでしょうか?

A. < 長岡氏 >

私自身はチケットング部にはいなかったのですが、正確なお答えできませんが、研究はしていました。ただ、チケットを販売する権利自体はFIFAのもので、あくまで彼らに決定権があります。だから、日本国内分(全体の50%)に関しては、JAWOCが販売方法を決められます。FIFAが持つ50%については、FIFAの問題です。ですから日本国内分に関しては、「問題なく販売されました」ということです。

Q. < 田中氏 >

チケットの話が出ましたが、僕自身、ダブルブッキングを受けてしまった当事者です。これは2次ラウンドでもたくさんあったかと思うのですが、僕は地元静岡での、イングランド対ブラジル戦を楽しみに行きました。その時、自分の席に誰かが座っているのです。別にJAWOCをかばうわけではありませんが、その時は対応がとても良かったです。カテゴリー3の席だったのですが、スタッフにクレームを付けたところ、すぐに対応してくれました。内心、カテゴリー1の空席の方に連れて行ってくれるのかなと期待しましたが、同じカテゴリー3の14、5人分の空席の部分に座りました。おそらく、事前にカテゴリーごとに予備席を設けてあったとようです。これは、非常に良かったと思います。逆に、満員にして、ダブルブッキングの場合に通路に座らせるという方が問題ではなかったかと思います。そういう意味で、9割程度埋まっているという方がちょうど良かったのではと思っています。リーグなどにとっても、良い教訓だったのではと思います。ちなみに、先に座っていた方のチケットは正規のチケットだったと思います。何故なら、私のチケットは氏名欄にブラジル航空名とありましたから、ブラジルの試合についていくというチケットで、先方の彼のチケットは、エコパ指定のチケットで、たまたま全く同じ番号でした。そういうことで、今回、空席問題が色々と言われましたけれども、これが満席になってチケットを持っていた人が入場できなくなったということの方が問題だと思います。JAWOCを弁護するわけではありませんが、こういう事例もあったということで、今後の糧にし

ていただければよいかと思ます。

< 中塚氏 >

同様の体験をされた方はいらっしゃいますか？

Q. < 佐藤氏 >

私は、決勝で偽チケットをつかまされたものです。その時は、はじめからそういう噂がありましたが、あるところから購入しました。それでも、新聞にも書いてありましたが、別の席に移動をしてくれて、ということだったのでスタジアムに入りました。ただ、同じチケットを持った人が 200 人くらいいましたので、別室に連れていかれて説明を受けました。それで、別の席、いわゆる見切り席と言われる所がありまして、そちらに移動して実際に試合を観戦できたので、別に問題はありませんでした。ただ、はじめから入場を断られる人もいたということで、その人は結局試合を見ることはできませんでした。スタジアム中に入れるかどうかの基準は、チケットもぎりをしているボランティアの人の感じ方が何かであったと聞いています。こういうことが決勝で起こってしまい、チケット自体も実は、はじめ郵送で送られてきたチケットと後から発券したチケットを比較すると印刷の具合が違って見分けがつきにくいなど基本的な問題があったのではないかと。日本のびあなどではそういうことが無いと思うのですが、JAWOC 側にそうした認識があったのでしょうか？

A < 中塚氏 >

今日は、ここにチケットの担当の者がおりませんで、なかなかそこから突っ込んだ議論はしにくいと思ます。ただ、チケットを手に入れた方は分かるかと思ますのですが、非常に精巧に出来ていますね。ホログラムの部分も、角度を変えると3種類の絵柄が出てきたり、手の込んだ工夫が施されたチケットだな、と受け取った時点で印象を受けました。ただ、あまりに早くチケットを受け取ると、今度は偽造のチケットが出回るといことで、チケットを発行するタイミングはどの大会でも難しいと感じます。

これに関連してコメントがあれば、お願いをしたいのですが…。チケット問題になると、全体にトーンが下がりますので、何も無ければこのテーマはここまでにしたいと思ます。

Q. < 小松氏 >

宮城ベニューの方のお話の中で、ベガルタ仙台の話が全くなかったので、教えて頂ければ幸いです。新潟がワールドカップ後も盛り上がっているといことで、ワールドカップの経験を生かして、各県や各市のサッカー協会とJクラブとの良い関係について知りたいので、質問させていただきます。

A. < 村林氏 >

色々な背景がありますし、宮城には宮城の事情があります。もちろんベガルタにもそれなりの事情がありますから。おそらく今回のワールドカップの10会場の中で、新潟は最も良い実績を残している方のベニューだと思ます。茨城は別格で、もともと茨城県内における鹿島アントラーズの位置付けは、Jリーグの中でも特筆すべき存在で、運営やスタジアムも素晴らしい経験を持っていたベニューです。しかし、茨城を除いた9ベニューの中で、地元のサッカー協会とJリーグのクラブが上手くかみ合っていたのは、私が見る限りでは新潟だろうと思ます。そういう意味で、今後の新潟の状況を見て頂くと良いのでは、と思ます。

< 中塚氏 >

茨城の事例が出ましたので、長岡さんにもコメントして頂きたいのですが、その前に、中西さんの質問で「長

岡さんの話の中で、食べる・飲むことが触れられていましたが、スタジアム周辺に屋台があったというのは、国内では珍しかったのでは、という質問がきていますので、中西さんに補足の質問をして頂きます。

Q. <中西氏>

僕は横浜、宮城と韓国の大田(デジョン)と蔚山(ウルサン)に見に行ったのですが、屋台のようなものは見ませんでした。FIFAのエリア管轄の問題で厳しかったのかなと思いましたが、なぜ茨城だけが可能だったのかということについてお聞きしたいのですが。

A. <長岡氏>

茨城だけが特別に申請をして認めてもらったわけではありません。茨城では、開催地である県を中心として、ホスピタリティーに関する分科会をワールドカップに向けて組織しました。その中には、地元の商工会であるとか、県の観光課といったところが一体となって、ホスピタリティーをどのように実践するかを論議してきました。その中で、フランス大会の視察の経験などをもとに、スタジアム周辺で何かやろうとする意見が自然に出てきました。先ほども少し触れましたが、開催自治体側が屋台の出店を呼びかけても3試合だけだと採算が合わない可能性があります。しかし、茨城の場合には従来のJリーグの時に出没しているお店に、ワールドカップの時も出してもらおうということになり、比較的簡単に出せたのではないかと思います。

それから、こういったものを設置するにあたっては、FIFAというよりはお客さんの導線のことを考えて、地元の県警などから「人混みの中に店を設けるというのは難しいのではないか」という議論ができました。しかし、茨城の場合は、Jリーグ時の既存のものをワールドカップでも設営しただけですので、その意味ではギャップはほとんどありませんでした。試合がJリーグとワールドカップという違いだけで、やっていることは何ら変わりなかったと言えます。他の会場は、ワールドカップとJリーグを別物として取り扱ったとか、警察も普段Jリーグで行われている状況と違うという意識が強く働いて、屋台を出店した場合の状況を事前に予想できなかったのではないかと思います。

Q. <戸村氏>

長岡さんは「鹿島は常時Jリーグの試合を行っているが、他のベニューのスタジアムでは行っていなかった」とおっしゃいましたが、他会場の中にも、Jリーグで2万人以上を動員しているスタジアムとして長居スタジアムと横浜総合競技場があります。横浜は、明らかに鹿島と違ったのですが、JAWOCの方々といろいろと連絡会議を行っている中で、横浜と長居で出来ずに、鹿島では可能であったという地域要因というものは何なのか。個人的なご意見で構いませんのでコメントを頂けますでしょうか。

A. <長岡氏>

説明の中で欠如していた部分があり申し訳ありません。鹿島の場合、スタジアム周辺は運動公園の中にあります。確かに長居(大阪)も運動公園の中にありますが、導線の問題とか、すぐ道路を隔てたところにコンビニエンス・ストアがあるとか、そういった立地条件が全く違うという点で、横浜や長居のような大都市のスタジアムと鹿島では決定的に違うと思います。鹿島の場合、近くの駅から歩いてスタジアムまでの間に、コンビニエンス・ストアは3軒しかありません。その点だけでも横浜や大阪と大きく違います。JR鹿島線の場合、お客様は鹿島神宮駅に着くとしても、成田駅から鹿島神宮駅までは単線しかありませんし、途中は無人駅のような場所を通ってくるわけで、そこで買い物をするなどとても無理な話です。逆に、横浜や長居のようなところにお店が出たとしても、人で混雑するだけで、かえって苦勞してしまうのではないかと思います。鹿島は非常にローカルなところですから、急にどこかで食事をしたくても、場所がなかなか見つかりません。そういう意味でもホスピタリティーとして屋台が必要だったと思っています。

Q. <中塚氏>

これまでワールドカップを開催した国は、アメリカを除いて全て、サッカーが生活に定着している国々です。そこでは、日常的なリーグ運営がベースにあって、その上でワールドカップを開催したと思います。ですが、今回の日韓ワールドカップはそうではなく、「まずイベントありき」でした。重要なことは、この経験を次にどうやってつなげていくかだと思います。その意味で、鹿島や宮城、今日は清水からも来られています。今後、ワールドカップに何らかの形で関わってきて、それが今後、各地域にどのように残っていくのだろうかという点でコメントを頂きたいのですが。

A. <長岡氏>

茨城・鹿島は、町おこしの目的でJリーグのチームを立ち上げました。そのチームのスタジアムで2002年にワールドカップを行いたいという構想を描き、それに基づいてスタジアム周辺の道路などのインフラ整備を行ってきました。そして絵に描いたものを現実の形にして、大会が無事に終わりました。とはいっても、ワールドカップ後の絵を描いていないかといえば、そんなことはありません。あれだけ立派なスタジアムを鹿島アントラーズのホームグラウンドとして使わせて頂いておりますので、あのスタジアムを一杯にし、欧州のクラブのように満員で熱気があふれたスタジアムにしていきたいと思っています。できれば、今回のワールドカップが行われて、試合を実際に見て、スタジアム周辺の雰囲気を楽しんだ子供たちが、今度は実際にスタジアムのピッチに立つ、また日本代表に入りたいと思う、そういう形で先につながれば嬉しいです。

蛇足ですが、1984年にフランスで開かれた欧州選手権の準決勝、マルセイユの会場でフランス対ポルトガル戦がありました。その時、1人の少年がボールボーイをやっていました。その少年は将来、フランス代表のユニホームを着てプレーをしたいと思いました。そしてそれは現実のものになりました。その少年の名前はジネディーヌ・ジダンです。そういう選手が、何年か先に1人でも現れてくれればいいですね。そうした「ワールドカップの物語」を期待しています。

A. <村林氏>

FC東京の話を申し上げますと、昨年のJリーグで1試合あたりの平均入場者数は16,400人でした。今季は既に11節が終わり、前節までの平均で16,700人、300人しか増えていません。この点をどうするかということが、我々の最大のテーマです。ただ、ワールドカップが行われるまでの7節までが平均で約15,000人くらいです。ワールドカップ後の再開から11節までが平均で19,000人。その意味では、ワールドカップの前後で約4,000人増えているというも事実です。こういう数字は、何と何を比較すればよいかということもありますが、我々Jリーグ関係者としては、ワールドカップを機にこれだけたくさんの方々が見てくださったのですから、これからもサッカーファンとして見に来ていただけるように努力することが大切だと肝に銘じています。そういうことを続けていく中で、今、長岡さんがおっしゃったように、子どもたちが育って、代表のユニホームを着てやるんだという気持ちを持ってもらうことが大切です。また、スタジアムの快適さを追求し、少しでも良い環境で見て頂くことも大切だし、色々やることはあるかと思っています。

10のベニューが行うべきことに関しては、多少言いづらいところもありますが、宮城という場所を考えれば、とまかく頑張るべきことはベガルタであると思います。ベガルタの強化を担当しておられる丹治さんと1カ月間一緒にお仕事をさせて頂いて、非常に良いお付き合いをさせて頂きました。彼とは、違うクラブながら、ベガルタとは単なる1クラブとしてではなく、宮城を今後どうしていくかを考えて、ぜひとも頑張ってくださいとお話しました。その関係は今も続いています。Jリーグのクラブとして社会的な意味を持ちながら運営に取り組んでいくことが、我々の使命であると思っています。

A. <宮城島氏>

模範解答になってしまうのですが、1つは、子どもたちへの波及です。我々も交流の機会が少ない中で、できるだけ子どもたちを交流の場に参加させるように努力しました。個人的な話になりますが、今、幼稚園児である自分の子ども1人をとってみても、出場国の国旗を全部覚えたり、サッカー選手になりたいと言っています。こういった子どもたちに対する波及は、相当あったのではないかと思います。それを、今後、活かしていけるようにしたいと思っております。

それと、Jリーグに関しては、我々にはエスパルスがありませんから、今後も期待しています。それから、開催地ではないキャンプ地ならではのこととして続けていきたいと思っているのは、ロシアとの関係です。この夏に、全国少年少女草サッカー大会を開きまして、今年は男子が240チーム、女子が32チームの、合計272チームが参加します。これに加え、ロシアのサハリンからチームにも参加して頂いて、そして交流する予定です。

例えば、少年サッカー教室でロシアのコーチに指導をしていただいて、ミニゲームも行いました。その指導が面白くて、声を出さな、という条件のミニゲームだったのです。日本で指導する場合、もっと声を出せ、と指導をしていると思います。そのロシア人コーチは、少年サッカー教室などで全国をまわられている方です。最初は変なことを言うなと思っていたのですが、見ていると意味が分かりました。小学生年代では、体格差があります。草サッカー大会を見ていると、ゴールキーパー、ディフェンスの中央、フォワードの中央にそれぞれ160cmくらいの大柄な子がいて、その子どもたちが中心となってボールを集め、そして「キャプテン翼」で言えば「日向小次郎」のようなFWがテクニックとパワーで突っ込んでいく。その彼にGKがキックを蹴るという場合がよく見られます。練習の時に声を出している場合、そういった中心選手がチームメイトに指示をしています。それが悪いというわけではありませんが、その指導者によると「指示された方は自分の判断ではなく、他人の判断でプレーをしている」と。だから、声を出さなでプレーをして、全て自分で見て、考えてプレーをしろということ。そう指導をしていると、そんなに長い時間ではありませんが、動きが違ってきます。それまでリーダーだった子は、自分が声を出さないことでパスをもらえなくなりイライラしていましたが、他の子は非常に能動的に動くようになります。その指導には良し悪しがあると思うのですが、ある意味で非常に面白い発見にもなりましたので、今後も交流が続いていけばと感じています。

<中塚氏>

このシンポジウムも終了予定時刻の5時になりましたが、まだ終わりませんよ(笑)。もう1つ2つ取り上げたいテーマがあります。今、ここで紹介された物語は主催者側に近いエピソードがほとんどだったわけですが、実際はその受け手、あるいは単なる受け手にならないように、市民が主体的に動いて活動をしていた事例も、多々あったと思います。それも、今回のテーマである「ささえる活動」だと思います。ささえる活動に関わった学生団体である「LOVE JAPAN」を昨年のこのシンポジウムでもご紹介しました。メンバーの榎本さんから先ほどの宮城島さんの話に関連して、「横浜・桜木町の赤レンガパークでブースを出していたところ、ロシアの選手がやってきた」というエピソードがありますので、それを紹介して頂きます。

<LOVE JAPAN・榎本氏>

僕たち「LOVE JAPAN」は、海外から来日したサポーターやメディアの方々に、もっと日本を知って帰ってもらおうと思い、横浜・桜木町の赤レンガパークで「日本体験ブース」を開いていました。

日本戦前日、非常に警備が厳しくなり、物々しい雰囲気になってきました。警備の方に理由を尋ねたところ「赤レンガパークの近くにナビオスというホテルがあって、そこにロシア代表が泊まる」ということでした。当日になって聞いたところ、前日の夜にロシア代表は船で海から入ってきたということです。色々な噂が飛び交い、非常に

物々しい雰囲気でした。その赤レンガパークで活動を行っている、どこからか「ロシア代表が来たぞ」という話がありました。写真を見せて頂いたところ、モストボイとカルピンなどの選手が来ていたようで拍子抜けしてしまいました、というエピソードです。今回、学生の視点でワールドカップに関わることが出来て非常に良かったという思いで一杯です。

<中塚氏>

宮城島さん側の視点からは、ひょっとするとロシア代表は日本の文化や生活に触れられなかったのではという危惧の念がありました。実際には選手たちは日本に触れていたのでしょうか？

<宮城島氏>

おそらく監督がうるさいので、選手の方がうまくやったのでしょう。良かったなと思っています。トレセンの方は、少し町中から離れたところにありますから日本に触れるというわけにはいかなかったかもしれません。

ここでマスコミの方もいらっしゃるのでは誤解を解きたいのですが、ロシアチームは非常に露出が少ないと思われていたと思いますが、実際は選手にしてもスタッフにしても、そんなに露出を少なくしようという意図は無かったようです。では、誰が情報を絞っていたのかといえば、1つはJAWOCのメディア担当の方がネックになっていました。この方は、JAWOCの方でも問題があったようですが、色々な取材内容を、FIFAがJAWOCかのルールに照らし、ADを持っている記者だけが見られるホームページに情報を出し、それ以外の人には情報を出さないというルールを厳格に守っていたようです。それで、ロシア選手団は「秘密主義」や「鉄のカーテン」などと言われることが面白くなかったようで、そのメディア担当の目を盗んでわざわざトレセンの外に行き、門の前で待ちかまえているメディアの方に色々話をしてくれました。ですから、必ずしもロシアが秘密主義ということではなく、ちょっとした行き違いで秘密主義に見えてしまったという側面があったと思います。選手が横浜で外出したのは非常に良かったと思いますので、そのエピソードを清水市側で残そうとしているロシアチームの全記録に加えさせて頂きたいと思います。

<長岡氏>

今のお話を元JAWOC職員としてフォローさせていただきます。チームのメディア対応について、そのチームに関する規制の権利は、全てチームのメディアオフィサーに委ねられています。それと、大会に入れば、FIFAの方で発給したADカードを受けたメディアのみが取材活動できます。そのカードを持っている取材者は、基本的にチーム側が受け入れの姿勢があれば、取材できる権利を持っています。FIFA側はその辺りを完全にクローズにする気はありませんでした。宮城島さんのお話を聞いていると、どこかで行き違っているなどという感じがします。

<中塚氏>

というように、それぞれ現場に携わっていると、その現場で起こっていることについてはよく分かって、その他の横浜にロシアチームが来ていたことなど、なかなか知る機会が少ないものです。こういう場を共有することによって、ワールドカップの、また訪れた人々の姿が、少しずつ明らかになっていくのかなという気がします。LOVE JAPAN以外にも、特にファンビレッジという形で交流を実現した「日本サポーター協会」理事長の浅野さんも来られています。昨年のシンポジウムでもファンビレッジの構想についてご説明いただいたのですが、実際に6会場ファンビレッジが設置され、それがどのように展開されていたのかをご説明頂けますか。

<日本サポーター協会 浅野氏>

ファンビレッジは、3年程前に日本でワールドカップの試合を行う10都市で、サポーターが集まって情報交換で

きる場を、行政ではなく市民が作るうという構想からスタートしました。そして、それが何となく夢となって、現実へと向かいました。その現実的にどういところに落とし込んだかという、もちろん我々だけで出来ることではありませんので、各ベニューにある市民団体の連携のもとに、結果的には6都市でファンビレッジを実現できました。具体的には、宮城、新潟、埼玉、横浜、鹿島、神戸の6都市です。それぞれ行政の方にご協力いただきました。また逆に、行政のファンビレッジやサポータービレッジの中に市民団体が入っていく、という形でも実現できました。その中には色々な特徴があったのですが、1つだけものすごく変わったところが横浜です。この運営主体は横浜青年会議所で、後援には横浜市が入っていますが、名前が入っているだけでほとんど何もしていません。その他の会場は、基本的に行政の方が中心、もしくはスクラムを組んでという形でしたが、横浜だけはそうではありませんでした。それから6月3日から6月30日まで、ほぼ1カ月に渡ってできたということです。普通の観光客も含めて何百人という人が来たらしいのですが、その数はともかくとして、1カ月間できた、また一応ワールドカップを目的としたファンが集える場を作ることができたという点は、非常に良かったと思っています。ただ、まだ終わってから少ししか経っていませんから、反省点などの検証はまだ行っていません。今年中にはするつもりですので、また報告させていただきます。

< 中塚氏 >

ありがとうございました。本当にワールドカップの1カ月間は、頭の中がワールドカップ一色でした。毎年この時期にシンポジウムを行うぞと決意していたものの準備を整えておらず、ドタバタで何とかこの会の開催に漕ぎ着けることができました。総括は色々なところでなされていくと思います。そこで総括された内容を共有することが大切だと思いますので、ぜひファンビレッジの総括も聞きたいし、LOVE JAPAN の総括も聞きたい。それ以外の総括もできるだけ多くの人の目に触れるような形になれば、と思います。

最後に講演者の方々に一言ずつ頂いて、終わりにしたいと思います。

< 長岡氏 >

本日は本当にありがとうございました。また、皆さんとこのような形でお話しが出来て、光栄に思っております。“約束”と言いながら、(発表時間をオーバーし)約束を破る大もとをつくったのが私でありますので、この場を借りてお詫びすると同時に、また皆様の気持ちで、ぜひ2006年のワールドカップで盛り上げたいと思います。盛り上がるためにも、海外に行った選手だけではなく、Jリーグの選手にも目を向けて、今よりもクオリティーの高いサッカーをするために叱咤激励していただければ幸いです。ありがとうございました。

< 村林氏 >

今大会の準備において、テロやフーリガンについての対策項目が多く、とにかく大会を無事に行おうとすることに精力の90%以上を使い、ワールドカップって本当にこれで良いのかな、という気持ちのまま大会に入った感じでした。何かやろうとするとFIFAや警察とのやりとりが必要でした。ただ、結果として大事が起きなかったので、その取り組みが全て無駄だとは思わないし、特にテロが起きずにできたことは努力の結果だと思っています。

しかし、もともと日本人はこうしたエンターテインメントに慣れていないことも含め、1つの課題は、もう少し楽しめる何かを作り出す、自然に楽しめる雰囲気を作る、ということが重要なのでは、という気がします。細かい話なのですが、メキシコ、エクアドル、スウェーデン、アルゼンチンのそれぞれに、彼らが聞いて1番気に入るだろうと思う曲のCDを探して準備しました。キックオフ前の60~70分は全てFIFAにコントロールされているのですが、選手がスタジアムに着く90分前頃はFIFAのコントロール外です。ですので、彼らが私服でピッチ上に現れる時に、準備した曲をかけました。その時、サポーターと選手がその曲と一緒に、楽しい雰囲気ができました。特にメキシコの人々はとても喜んでくれました。そういうことは自己満足の話であまり広まっていないのですが、どうしたら

選手やサポーターに喜んでもらえるかを考えて行ったことの1例です。

今後も、“楽しめる雰囲気を作り出すこと”を課題の1つとしていきたいと思います。ありがとうございました。

<宮城島氏>

私はこの半年間、凝縮してワールドカップに関わることになりました。この間に失ったものもあります。私は、プライベートな部分で清水サッカー協会の常任理事もやっております、そちらでのサッカーの普及がメインの活動です。期間中、そちらの方が疎かになってしまったことが残念です。1番大切なのは、サッカーやスポーツをやる人、観る人、ボランティアのように運営に関わっていく人、という人たちが増えていくこと、そして内容的な喜びの質も高めていくことだと思います。そういうことに対して、ワールドカップがどれだけ貢献できたかと、これだけの金と労力を普及の方に別のやり方で用いれば、もっと普及は進んだのではないかと考えます。そう言われぬように、今後に活かしていくことをもっと考えていかなければならないと、私は思います。個人的には、できるだけロシアのキャンプの経験が次につながるように頑張っていきたいと思っています。どうも、ありがとうございました。

<中塚氏>

皆さんからたくさんのご意見、ご質問を頂いております。例えば日韓共催の観点をどう考えるのか、などです。お答え出来る時間が無くて申し訳ありません。このように、今後もいろいろな「物語」が、さかのぼって出てくると思います。サロン 2002 のホームページ上にも、そうした物語を集める掲示板を設けておりますので、皆さん1度、ご覧下さい。また、書き込めるスペースもございますので、そこに物語を集めていければと思っています。

長時間に渡り、ありがとうございます。そろそろ会場を出ないといけない時間です。それでは、3人の講演者の方にあらためて拍手をいただいて終わりしたいと思います。ありがとうございました。

サロン 2002 ワールドカップ総括シンポジウム

< 神戸会場 >

「観戦と交流の物語」を中心に

名 称 ワールドカップ総括シンポジウム(第2部) - 「観戦と交流の物語」を中心に

主 催 サロン 2002

後 援 兵庫県サッカー協会 神戸ファッション美術館 NPO法人神戸アスリートタウンクラブ

運 営 サロン 2002 ワールドカッププロジェクト

日 時 2002 年 8 月 10 日(土) 13:30 ~ 17:00

会 場 神戸ファッション美術館 5F オルビスホール

内容・演者

基調講演 「ワールドカップ史からみた 2002 年大会」

賀川 浩(スポーツライター)

「フットボールの母国からみた 2002 年大会」

スー木下(英国大使館広報部長)

「市民が伝えた 2002 年大会」

橋本 潤子(ライター / サポータープロジェクト 2002)

「メディアが伝えた 2002 年大会」

宇都宮 徹壺((株)スポーツナビゲーション / 写真家)

司会進行 中塚 義実(サロン 2002 代表)

オープニング・スピーチ サロン 2002 代表 中塚 義実

サッカーを愛する皆さん、こんにちは。第2回ワールドカップ総括シンポジウム、先週の東京に続き今回はここ神戸で『観戦と交流の物語』というサブタイトルを設けて行います。

皆さんそれぞれが色々な思い、出会いを体験され、この夢のような1ヶ月を過ごされたと思います。サロン 2002では、この1ヶ月を一過性のイベントに終わらせず、我々が得たものをワールドカップ以後にどうつなげていくかを考えるために、このシンポジウムを企画しました。

「あれが良かった、これが悪かった」と評価するだけでなく、様々な物語を出し合い、それを各自が持ち帰って今後の活動に活かしてほしい。そんな主旨で企画しておりますので、総括とは言っても「結論」が出るような会ではありません。ですから、フロアーからもたくさん「観戦と交流の物語」が提示されればと思います。

この会は2部構成になっており、第1部は賀川浩さんの基調講演、その後3人の演者によるシンポジウムです。シンポジウムの後半戦はフロアーの方も含めたディスカッションとなっております。

ワールドカップを思い出しながら、夏休みの午後を密度濃く過ごせるよう、皆さんご協力お願いいたします。

それでは早速、日本最古の...、じゃないですね(笑)。日本最年長のサッカージャーナリスト、地元神戸の賀川浩さんにお話し頂きましょう。

基調講演「ワールドカップ史から見た2002年大会」 賀川 浩(スポーツライター)

5月31日から6月30日まで、2002年ワールドカップは日本と韓国で行われました。今からわずか1ヶ月半前のことですが、遥か遠い昔のことのような気がしています。それだけ、あの1ヶ月間というものがエキサイティングで面白かったということでしょう。

メディアやテレビ番組の出演者たちが、サッカーを初めて見て、面白さに気付いたという話をしているのを聞く度に、微力ながらも日本サッカーの発展や普及にかなり精力を使い貢献してきたと思っていた我々の活動というのは、まだまだだったのだなと知らされました。

しかし、今回のワールドカップによって、1億2千万の日本人のうち80%くらいがサッカーに関心を持ってくれた、これは日本にとって非常に大きいですね。

(以後、スライド使用)

日韓報道の温度差

さて、こちらの朝鮮日報をご覧ください。開幕試合を伝えるのに、かなりのページを割いています。

ワールドカップを総括する際、海外のメディアは日本と韓国の温度差というものを伝えていました。日韓

の16強入り後、韓国は勝ち上がり日本は敗退したということも関係あるのかもしれませんが、実際にはそれ以前に既に温度差があったように思います。

ロンドンタイムズでは、勝ち上がり表や試合結果などを漢字とハングルの2つの形で掲載し、また、日韓の試合があった翌日は、例えば稲本と黄善洪(ファン・ソンホン)など、日本と韓国の選手の写真を特集の一面の上の方に載せています。

このように、海外メディアはワールドカップが日本と韓国で行われているということを意識し、工夫して見せていたわけです。

これはちょっと余談になりますが、「決勝トーナメント」という日本語は間違っているという例です。左側は講談社が作ったオフィシャルプログラムの日本語版で、右側は韓国語(韓国で発売)です。

韓国の目標として、日本語では「決勝トーナメント進出」、韓国語では「16強に出る」、英語では「セカンドラウンド進出」と書いてあります。ここに今回、日本のスポーツ界の「トーナメント=(イコール)ノックアウト・システム」という誤った思い込みが出てしまいました。

日本語で間違っている分にはまだ良いのですが、それを丁寧に英文でも「ノックアウト・トーナメント」という言葉が公式プログラムに載ってしまったわけです。

私の運営するインターネット上には、「日本語は日本語で良いじゃないか」という声もありましたが、今回のように今後、日本から世界へサッカーを発信する機会が増えることを考えると、やはり良くありません。

話を元に戻しましょう。これはソウルのスタジアムです。日韓の温度差の1つに、韓国は首都・ソウルでワールドカップを主催したが、日本は首都・東京で開催しなかったということがあります。

韓国はディスカウントショップを入れるなどワールドカップ後の利用法も考えて、ソウルにスタジアムを新設しました。日本には国立霞ヶ丘競技場がありますが、ここはサッカー専用スタジアムではなく、記者席の位置や屋根が無いといった問題がありました。いくら不景気とは言え、日本にはお金が無いわけじゃない。しかし、日本はそれらを改修してまで、東京で開催しようとはしませんでした。

共催が決まると韓国はまず、蹴球協会会長であり、FIFA副会長でもある鄭夢準(チョン・モンジュ)さんたちの努力により、スタジアムを作るにも何をするにも、国として総合的に考えるようになりました。

日本は縦割りの国ですから、スタジアムを新設しても、そのための道路や鉄道新設にまでは手が届かない。いわば、片手間で開催したわけです。そこにまず温度差がある。その温度差が、色んな意味で最後まで響きました。

韓国は、大会を開催することがどれだけ大きなことであるか、そして、それが今後自国のサッカーだけでなく社会全体にどれだけ大きな影響を与えるかを最初から理解していました。

さらに韓国には、黄善洪や洪明甫(ホン・ミンポ)といった1990年のイタリア大会から毎回1勝もできずに帰ってきて、ホームでやるのがいかに有利であるか、そしてどれだけ頑張らなければならないかを知っている選手がいました。しかし、日本は若手中心で、「リーグ設立当初から頑張ってきた選手が中山(雅史)や秋田(豊)の他にはいない。若く素質のある選手を選ぶのは戦術面の方針としては正しいことですが、そうした年齢層の幅の薄さも、今大会の成績に影響し

たでしょう。

我々は、今や遠い昔のこのように感じてしまうほど熱くなっていたわけですが、全体として取り組む姿勢は、やはりまだ甘かった。ここにいらっしゃる方々やサポーター、ボランティアの皆さんの力の大きさには感謝しておりますが、古くからサッカーに携わってきた者の頑張りがいま1つでした。これも、日本サッカーの実力かな、と思っております。

もっとも、「共催」ということで歴史的にうまくいっていなかった両国が、今回サッカーを通じてうまくいくなった。セカンドラウンド進出後、日本が負け韓国が勝ち進むにつれ、私の周囲にも色々言う人はいましたが、とにかく、相互理解が進んだということは、非常に素晴らしいことです。

さらに、共催の協調意識と、日本が勝ったなら韓国も勝たなければならないというライバル意識も、ある意味で良い結果をもたらしたと思います。様々な見方はあるでしょうが、共催という難しいことを見事やってのけた。そういう意味では、大会そのものは良かったと言えます。

テレビ・マネーと過密日程問題

日韓共催の成功、アジア初のワールドカップというのは欧米の人々に今までと違った目で日本を見てもらう機会になりました。

ヨーロッパはかつて、「日本にもサッカーがあるの？」という状況でした。1936年のベルリンオリンピックでチームに随行した田辺五兵衛氏は、海外記者と日本でもフットボールをしているという話になった時に、「ところで靴は履いているの？」と聞かれたそうです(笑)。

それから60年以上経った1998年のフランスでも、「日本でもサッカーするの？」という程度でしたが、日本開催により日本サッカーを知らしめるだけでなく、漢字など日本文化を伝えることもできました。

今大会を、ワールドカップという1つの長い流れから出てきたものとして考えてみましょう。

1995年にB sky B(ピースカイベー)というマドックさんの会社がプレミアリーグと契約しました。それ以降、payテレビの参入によりサッカー市場が変化したのが20世紀の終わりの5年間でした。

payテレビ参入によりイングランドのリーグが、まず

高額の放送料を手にし、次いでイタリアはじめ各国のクラブが高額の収入を得る、ソ連崩壊により東欧圏の選手が西側に流出し始めた、EUのボスマン判決というものにより選手の移籍の自由が欧州サッカー界にもたらされ、新しい時代ができました。

それに対応してクラブは高額で良い選手を雇い、他チームから引っ張ってくるようになり、高額報酬を払って利益を生むためにトップクラブの試合が増加しました。

そうした流れの被害者が、98年ワールドカップ決勝でフランスに3-0という目も当てられない結果で負けたブラジル。それは、何と言ってもロナウドというエースストライカーが決勝当日に原因不明の体調不良に陥ったことにあります。

若くしてヨーロッパへ移籍したロナウドは、95年から小さなけがが続いていました。98年の定説になっているのは、その痛み止めの薬の副作用が決勝前夜に嘔吐や不眠の形で現れ、決勝で全く調子があがらなかった、と。真相は誰も語りませんが、そういうことになっています。活躍できなかったにもかかわらず出場した最大の理由は、契約していたシューズメーカーと高額な契約を交わしていたからだという噂も飛び交いました。

大会前からロナウドが大会のスターになるだろうと予想されていました。タイムズ紙もレキップ紙もワールドサッカーも世界のメディアは1998年の5月から6月はロナウドの特集の花ざかりでした。それが最終日に活躍しなかったがために彼は紙面から姿を消し、98年7月以降はフランスのジダンがもてはやされました。

ロナウドは99年に再び大けがをし、2000年4月のイタリア杯決勝でも筋肉断裂という大けがをした。それ以来、彼は身体を治し今日に備えてきたわけですが、我々のように古い人間からすれば、あれだけ膝を故障した選手の復活はありえない。しかし、今回彼は復活してきた。それが今大会の1つの大きな特徴です。

98年から続く過密日程のために優秀な選手がけがを完治する前に出場し、故障を繰り返す、そのために痛み止めを飲む。その悪循環により、96・97年にFIFAから表彰を受け世界最高の選手と評されたロナウドが98年には姿を消し、そしてさらに4年後に

復活してきた。

ロナウドが歩いてきたケガとの闘いとプレー・パフォーマンスというのはつまり、現代サッカーのトップ選手の宿命ではありますが、ロナウド自身の努力と医学の進歩による、今回のロナウドの復活と成功は、現代サッカーを象徴しています。

過密日程という問題から言えば、ジダンもベッカムもそうです。ベッカムはもともと小さな負傷の積み重ねでした。マンチェスター・ユナイテッドのスター選手といえどもそう簡単には休めず、チャンピオンズリーグにプレミアリーグ、リーグカップ、FAカップと、過密日程をこなさねばなりません。その結果がああなのです。

今回、無理やり治して出てきましたが、ブラジル戦での失点は、ベッカムが当然タックルを受けてでもタッチすべきところを足をかばったことにあります。ジャンプして逃げたところでボールを奪われ、それがブラジルの同点ゴールに繋がりました。これはやはり、ベッカムの足に問題があります。

フルシーズンを戦ったベッカムが故障を抱えて大会に出たが、ロナウドは回復してやってきたのです。

1人の選手が攻撃も防御も

ロナウドについてもう1つ申し上げますと、彼は天才的なストライカーであると同時にボールを奪うというに優れた選手です。日本でいうと明神。明神は守備の天才です。「ここでボールを取ればチャンスになる、このボールは徹底的に追わなければピンチになる」、彼は19~20歳の時にそういうことを既に分かっており、その通りに身体が動いていました。こうしたプレーは、一生懸命練習して全体の流れを見られるようになって、普通24~25歳でできるようになるものなのです。彼はその点、とても早く感得していましたね。

98年ワールドカップの1次リーグ・モロッコ戦を見ていた時のことです。ロナウドが突然真ん中からタッチライン際にスッと動いたので、「はてな？」と思っていたら、その瞬間にモロッコの右のディフェンスがボールを止め損なったのです。そこをスピードのあるロナウドが奪ってドリブル、ペベトに渡して3点目のゴールとなった。それが非常に印象に残っていますね。ああ、この選手はこういう能力もあるのか、と思ったものです。

今回のドイツとの決勝の1点目のゴールも、彼がド

リブルで仕掛けてボールを奪われ、相手センターバックが前にいるハマンにパスしたところを、ペナルティエリアの近くで奪い返して、リバウンドにパス、シュートをさせた。彼は、普通のシュートなら簡単に決めさせないカーンがミスをするかもしれない、というのを察知して飛び込んで行ってリバウンドを取ったわけです。

シュートやドリブルといった攻撃と同時に相手のボールを奪うという守備ができる。攻撃の選手でありながら守備能力も非常に発達しているという選手をどう見るようになったのか、と思ったものです。ペレもそうでしたが、これほど顕著には表れていませんでした。

1980年代の非常に攻撃的だったフランス代表のアラン・ジレスに「あなたはチームの仲間で、誰のどんなプレーがほしいか」と聞くと彼は「ティガナだ」と答えました。マリ出身のフランス代表ティガナは今、稲本のいるフルハムの監督をしていますが、彼は攻撃も守備もできる選手でした。パスワーク、シュートの名手・ジレスは、彼のボールを奪う能力がうらやましいと言いました。

中塚 74年大会から取材されている賀川さんならではのお話でした。

さてここからは、3人の演者の方に順次プレゼンテーションをしていただきます。最初は英国大使館の広報部長・スー木下さんです。

「フットボールの母国から見た2002年大会」 スー木下(英国大使館広報部長)

「海外から見たワールドカップ」ということで、世界中の何千万、何億という人が楽しんだワールドカップを1人のイギリス人としてお話ししたいと思います。

私はイギリス人であるにもかかわらず、これまであまりサッカーに興味がなく、ワールドカップに関心を持ったのも恥ずかしながら今回が初めてでした。ですから、今回ワールドカップ関連の仕事をする機会を得て、とても良い経験ができました。そうした経験を活かして今後どうするかという観点からお話します。

大会前の3つの心配

まず、大会が始まる前の海外の期待感についてですが、率直に言うと、日本と韓国が共催するワールドカップというのはどうなのかなあという疑問の声が

1989年のトヨタカップ前にACミランを取材した時には、ファンバステンに色々話を聞きました。「あなたが最も尊敬する選手は誰か」と質問すると、あの名シューター・ファンバステンが「ライカールトだ。彼のように攻撃も防御もできる選手がうらやましい。」と言いました。

70年のワールドカップでオランダのトータルサッカーが始まって以来、ジレスにしてもファンバステンにしても、攻撃の選手たちがボールを奪う能力というものに目覚め始めていたのかなと、今回ロナウドを見て私も初めてそう思いました。

ですから、1人の選手が攻撃も防御もする時代がやって来たのかもしれませんが、でも、本当にそうなら、サッカーが面白くなってしまってもいいけどね(笑)。

まあ、この2点が今大会の象徴的な出来事であったと思います。フランス、イタリア、アルゼンチン…。サッカーの話になれば2日でも3日でもかかるほど色々ありますが、このくらいにしておきましょう。

多かったです。要因はいくつもありました。

1つ目はサッカーの文化が浅いということ。「日本ってサッカーやっているの？」と思っている人も結構いて、地元の人たちが関心がないのでは盛り上がらないのではないかと心配していました。

2つ目は、ヨーロッパや南米のサッカーの歴史が長く、盛んな国から遠いこと。遠いし高いし、欧米のサポーターは応援に行けないのではないかとということです。ヨーロッパなら一泊程度で行き来できても、日本や韓国では有給休暇を1週間取らなければならず、旅費もかかります。それが障害になるのでは、という声がありました。また、家でテレビ観戦するにしても時差の問題があるので、試合を観ること自体が難しいのではないかと。

3つ目には、日本と韓国の当局には、大掛かりで近代的なサッカー・トーナメントを組織するに十分な経験があるかどうかということです。警察の取り締まりは融通が効かず発生的なものになるのではないかなど特に警備の面での不安が大きかったですね。

イギリス国内に交流が生まれた

しかし、結局、それらは全て根拠の無いものだと判明しました。日韓の人々はワールドカップの精神を他の国々の人と共有できたし、今回のサッカーへの熱狂が伝わったことで、日本は世界のサッカー・コミュニティに迎え入れられました。

旅費に関しては確かに問題でした。前回フランス大会では約5万人のイギリス人がフランスを訪れましたが、今回は1万人を下回ってしまいました。とは言っても、実際に日本へ来た人はこれまでに無い様々な経験をすることができ、一生忘れられない記憶に残る大会となったと言えます。でもやはり、実際に来て観戦できた人が少なかったというのは残念です。

イギリスでのテレビ観戦に関しては、実はとても良い結果となりました。早朝や昼休みなどの時間帯に行われる試合では、職員や社員、学生たちがサポートして観戦するのではないかと予想できたので、会社や学校に大型スクリーンを設置して皆で観戦するところが多かったのです。その結果、普段はサッカーに興味のない人も一緒に試合見ることになり、そのおかげで初めてサッカーの楽しさを知ったという人がかなりいたそうです。

また、観戦を通して同じ社内においても話す機会のない人と交流できたという話も聞きました。日本と世界の間の交流はともかく、こうしたイギリス国内での交流が生まれたという皮肉な結果が出ました。

イギリス人は日本人と同じで、普通誰かの紹介がなければ他人と話をしませんが、友人によると、大型スクリーンが設置され試合中継が行われていたロンドン市内のトラファルガー広場では、全くの他人同士が言葉を交わし、冗談を言い合い、一緒にビールを飲むなど楽しそうな光景が見られたそうです。今回のワールドカップは、家族や会社だけでなく地域社会の交流のきっかけともなりました。

日本のイメージが変わった

日韓当局に十分な経験があるかという問題については、とても効果的に試合運営がされました。イギリス国内の新聞では、トラブルも少なく、最近の大会のなかで最もスムーズだったと評されています。他にも、素晴らしいスタジアム、効率的なシャトルバスの運行、警察の融通性などを評価する記事がたくさん出ています。これらの点から、日韓共催ワールドカップは両国のPRに多大な貢献をしたと言えます。

しかし、それより大切なのは、今大会が世界の人々の日本へのイメージを変えたことです。イギリス人の持つ、日本人のステレオタイプのイメージは、真面目で良く働き、あまり個性が無いなどでした。しかし、今回ワールドカップを通して、日本人は楽しむことが大好きだということ、自信を持って個性を表現できる人がたくさんいるということが分かりました。

今朝、私は新幹線で参りましたが、前回乗った時とは大違い。前回はイングランド対ブラジル戦の時に、イングランドやブラジルのサポーターと一緒に多くの日本人が盛り上がっていて楽しかったです。それに対して今日の車内はとても静かで対照的でした。たった1ヶ月間のこともかもしれませんが、とにかく、日本人は皆が思っているほど真面目じゃないということがイギリス人に伝わりました(笑)。

それからもう一つ、日本人は礼儀正しいけれど少し冷たいと思われていました。しかし、今回日本を訪れたイギリス人たちは、日本人は親しみやすく、とても温かく迎え入れてくれたと、その親切や寛大さ、もてなしの精神の話を母国に持ち帰って伝えていることでしょう。

しかし、日本人がどうしてあんなに一生懸命イングランドチームをサポートしてくれたのか、それだけはいまだに分かりません(笑)。

自国以外の国を応援することなどイングランド人には考えられないのですが、日本人はとても熱心に応援してくれました。それがどうしてなのかは理解できないけれど、自分と同じくらいイングランドのサッカーが好きだということがイングランド人は嬉しいし、とてもありがたいと思っています。共通の興味が友情を育むというのは周知の事実ですし、それは日英の親善関係にとっても良いことだと思います。この点から、ワールド

カップ共催は日本に多大な利益をもたらしたと言えます。

非常識なフーリガン報道

しかし、また場合によっては全く違う結果が出ているかもしれないということも考えてみたいと思います。それは日本のメディアによるフーリガン報道です。これは、日本のイメージを悪くする可能性があります。

4月に札幌に行った際、7歳くらいの女の子に「ワールドカップは楽しみ？」と聞くと、「ううん。だって2週間、外で遊べないもん」と答えたのですよ。悲しいことですよね。地元でワールドカップがやってくるというのはどんな子供にとっても一生の思い出になるはずなのに、その女の子はひどく怖がっていました。

「フーリガンがやってくる！」という報道を見て危機を感じた大人たちが、訪日する外国人全てを子供たちが怖がるような伝え方をしてしまったのです。

女の子が1度持ってしまった「恐ろしい、危険」という外国人のイメージは、将来心から完全に消え去るのでしょうか。本当に残念に思います。

また、ワールドカップ期間中は店を閉めるという商店や、外国人を泊めないというホテルもありました。外国人の立場になってみてください。はるばるやって来たのに食べる所も泊まる所もない。それは彼らに一体どのような印象を与えるでしょう。

訪日予定の無い人々も、ワールドカップ前には日本に対してかなり否定的な印象を持っていました。というのは、日本中で吹き荒れていたフーリガン報道に関する記事を英国のメディアが列挙していたからです。多くのイギリス人にとって、札幌は「ネットガンの街」となっていました。大阪は、投石を恐れて石を地面に貼り付けたとして有名になりました。知名度を高めることは開催地の1つの目的ですが、そういう形で有名になりたかったわけではないでしょう。

ただありがたいことに、多くの日本人はそうしたメディアの過剰報道に気付き、外国人サポーターはそれほど悪い人間ではないと自身の判断を下してくれました。

私たち大使館も、開催地でタウンミーティングを行ったり、新聞記者をイギリスに派遣してサッカー事情を実際に確かめてもらったりなど、フーリガンに関する誤った認識を正そうと努力しました。イギリス人サポ-

ーターに関するチラシも作り、約4万部を開催地の商店やホテルに配布しました。

チラシを配っていると、「ワールドカップを商売のチャンスにしたかったのだけど、フーリガンの話を聞いてちょっと諦めていたんだ。でもこれを見ると、阪神タイガースのファンと変わらないんじゃない(笑)」と言う方もいて面白かったです。

そうしてワールドカップへの準備を始めたり、ポスター(チラシ)を貼ってくれる方がたくさんいました。商店の人や一般の人たちのそうしたサポートが本当にありがたかったです。

確かにイングランドサポーターと日本人では文化的な違いがありましたが、サポーターたちはフラストレーションを全く感じることなく、共通の興味であるサッカーの祭りに参加できました。

つまり、日本の一般の皆さんのおかげで今回のような良い結果となりましたが、場合によっては全く異なる状況が起こり得たというわけです。これはメディアの方々に反省してもらいたい点ですね。

庶民同士の交流に意義

さて、肯定的な話に戻りましょう。先ほど英国内での日本のイメージが変わったという話をしましたが、同様に日本における英国のイメージも向上しました。

イギリス人は堅苦しくてよそよそしいというイメージがあったと思いますが、今回何万人もの日本人が真の英国人と接したことで、楽しみを追い求める生き生きとした国民だということを知って頂けたでしょう。

今大会の良い点として、観戦者が日本全国を旅することが挙げられます。札幌や掛川、大阪を英国人が大挙して訪れることなど普段では考えられませんが、ワールドカップは地元の人々にイングランドサッカーやイングランドサポーターを身近に感じる機会を与えてくれました。その意味で、草の根レベルでの相互理解、交流に役立ったと言えます。

さらには英国の庶民の文化を目の当たりにしたことで、優雅なアフタヌーンティーやゴルフ、ガーデニングのイメージに若々しく活気に満ち溢れたイメージが付け加えられ、日本人は英国全体のイメージを改めたことでしょう。

特に若者たちは、英国が彼らにとって魅力ある場

所だということに初めて気付いたようです。そうした形で、日英両国はお互いの現代的で肯定的なイメージを投影することができました。

今後の課題は、今回生まれた理解と善意をどのように発展させていくかにあります。一過性のもので終わりにしてしまってもったいないですね。

イギリス国内ではいまだに皆代表ユニフォームを着ていますし、車にはイングランドの国旗が掲げられています。しかし、日本にはもうワールドカップの形跡がありません。閉幕直後の7月2日、成田空港でワールドカップのお土産を買おうと探したのですが何も無かったのです。売り切れだったのが商売上の判断だったのかは分かりませんが、「えっ、もう終わってしまったの？」と残念に思いました。ですから今後はもっと継続的なものに繋げていくように努力する必要があります。

英国のライフスタイルに好印象

実は、既にお互いのイメージが変わったことが行動の変化に表れ始めています。ある旅行会社のレポートによると、イギリスに旅行する人の数が300%も増大したとのこと。確かに私が帰国する際にも飛行機は満席でした。また、若い男性の姿が目立ったのが印象的でした。これまで英国を訪れるのは年配の方や女性が多かったので、若い男性がイギリスを訪れるようになったのはとても嬉しいことです。

それから、関西外語学院大の学生に対する調査によると、約4割の生徒が英国に留学したいと回答しています。理由を詳しく読むと「ベッカムに先生になってほしい」などと書かれているので、あまり真面目に

答えていないのかもしれませんが(笑)。

これまで英国は教育水準の高さには自信がありましたが、ライフスタイルなどについては若者に受け入れられるか疑問がありました。しかし、ワールドカップのおかげで英国のライフスタイルや社会がとても魅力的だという新しい認識が加わりました。

日英両政府、地方自治体、ボランティア、NPOなどは、ワールドカップを通して両国に芽生えた新しい友好関係をより長く続くものにするために何が出来るか、各自考える必要があります。

大使館は既に様々なプロジェクトに着手しています。例えば日本の子どもの障害者サッカーチームをイギリスに招待する企画を進めたり、日本にサッカー学校を設立する英国の会社への援助を行ったりしています。さらには、日英両国の学校で行われるサッカー関連のプロジェクト、日本の若者が英国の一流サッカー学校へ留学できるプロジェクトなども企画しております。ロンドンの日本大使館では、ワールドカップ使用球を英国の小学校に寄付するという企画が行われました。今後も、こうした形で様々なアイデアが多くの人たちから提案されることを確信しています。

ワールドカップはこれまでの日英関係において最も素晴らしい出来事の1つと言っても過言ではありません。ワールドカップにより生みだされる興奮、友情、異なる文化に対する寛大さを維持していくことがとても重要だと思います。

今回、サロン2002がその重要性を理解し、これから先のことについて考える時間を与えてくださったことに感謝します。この後のディスカッションを楽しみにしています。

中塚 「イングランドから見たワールドカップ」。日頃我々が見落としがちな視点がかかなり網羅されていたので、後ほどディスカッションで深めたいと思います。

次の演者は、サポータープロジェクト2002を中心になって切り盛りされたフリーライターの橋本潤子さんです。

原型となるサポーターズプロジェクト98というのは、3番目の演者である宇都宮さんが98年フランス大会で「ワールドカップにはこのような人がやってくるのだよ。ロナウドやジダンだけではないのだよ」ということでサポーターの姿を写真に収め、インタビューし、それを一冊の書物にまとめたものです。

今回はそれと同じ手法で、日本にやって来た海外のサポーターを日本のごく普通の人取材する。そういうことを通して交流ができた。その辺りをお話し頂けるかと思います。

「市民が伝えた 2002 年大会」 橋本 潤子(ライター / サポータープロジェクト 2002)

この6月のワールドカップでサポーターズプロジェクト 2002 を実行しました。

このプロジェクトは日本を訪れた海外のサポーターに接触し、まずは仲良くなるというコンセプトを大切にして、日本に来ての印象を聞くアンケートや写真撮影を行うというものです。まずは、その成果をフラッシュという動画にまとめたものをご覧ください。約3分の作品を3本作りました。

(注:以後、映像使用)

外国人サポーターの素顔に触れる

今ご覧しているこの動画は、6月の半ばから7月いっぱいまで横浜スタジアムの最寄駅である新横浜駅前の駅前情報板で放映されました。スタジアムの近くなどでたむろしているサポーターも多く、興味深げに眺めている外国人サポーターがたくさんいました。

今回のプロジェクトは、宇都宮さんに「2002 年に日本でもう一度やってみないか」と声を掛けて頂いたのがきっかけでした。アンケートは総数で 150 集まりましたが、これは1人や2人の力ではなく、サロン 2002 や各会場のサポーター団体のメンバーの協力により成し得たものです。

実際の動きとしてはまず、1人1人がデジカメを持ってアンケート取材を行い、画像をメールで送信して、アンケート用紙をファックスで翻訳者に送ることでした。そして、翻訳されたアンケートをサポーターウェブという日本サポーター協会のホームページに順次アップしていきました。

今回訪日していたのは男性が圧倒的に多かったため、アンケートの回答者は男性が約8割を占めました。年齢層は20代が多かったのですが、実際には40代、50代の方もたくさんいらっしゃいました。国籍に関しては英語で話しかける都合上、英語圏の方が圧倒的多数を占めました。とはいっても全部で38カ国、ワールドカップに出場していない国の人々からも回答を得ることが出来ました。

職業はエンジニアや語学教師、弁護士、会計士など知的職業に就いている方が多かったです。うち

67%の人がメールアドレスを持っており、アンケート回収後も写真をメールで送るなどしてコミュニケーションを取ることができました。

“I am not hooligan.”

「夕べの食事は何でしたか」

アンケートの質問は全部で11項目ありますが、最初の質問はこれでした。サッカーには全く関係ないのですが、こうした話をする事で仲良くなることを目的にしています。

回答を見ると“日本食”と答えた人が多いことが分かります。お寿司という回答が多かったのですが、焼きそば、焼き鳥といった答えもかなりありました。彼らはスタジアムではなく、サッカーの試合を放映している飲み屋や居酒屋に行った際に食べていたようです。

私は実際にスタジアムで観戦したのは4試合だけで、その他の試合はスタジアム付近の居酒屋や六本木、大久保など外国人の多い地域のパブで観ていました。そこでは非常に多くの国内外サポーターが観戦していて、私自身、一緒にビールを飲んだり焼き鳥を食べたりして盛り上がり、メディアでは伝えられない外国人サポーターの素顔にも出会うことが出来ました。

先ほどの木下さんのお話にもありましたが、日本のフーリガン報道を気にしているイングランド人が結構いて、新潟には「フーリガンジャナイヨ」と手書きされたTシャツを着ているイングランド人も見かけました(笑)。また、横浜で活躍していたプロジェクト 2002 というサポーターグループが「I am not hooligan(フーリガン)」というオリジナルの缶バッジを作って配ったところ大好評で、皆胸に付けて誇らしげにしていたそうです。

スタジアム内で出会うと、日本人なら日本代表の話、外国人なら自分の国の代表の話をしがちで、比較的にかしまった話になってしまうのですが、居酒屋などに行くと、自分のひいきのクラブチームの話など、サッカーの代表以外の話で盛り上がる事が多かったです。

ある人などは、静岡でイングランド人と地元クラブ

の話で盛り上がり、お互いピンバッチを交換することになったそうで、彼に清水エスパルスのピンバッチをあげると、とても喜んで持ち帰ったということです。

それから、海外のサポーターは結構日本代表を応援してくれていましたね。私は日本対ロシア戦を六本木のパブで観ていたのですが、オフサイドの疑惑が生じた稲本のゴールにも、周りにいたベルギーやイングランドのサポーターは「ロシアが勝つとセカンドラウンドに進めなくなってしまうから、ゴールでいいよ」なんて言うてくれました(笑)。そんな風に交流しているうちに、日本人も外国人もサポーターは考え方や行動パターンが似ているのだと分かりました。マスコミが報道するような違いはありません。

セカンド・カントリーを応援

「開催地について思うことを言って下さい」

クエスチョン2は、日本人は落ち度を気にするので、そういったことがあれば指摘してほしいということで質問をしました。

「駐車場が遠い」など実際に不満を述べてくれた人も一部いましたが、「素晴らしい雰囲気だ」などの回答が多く、中には「どこでやっても多少は不満があるのだから、日本でも気にすることないよ」となぐさめてくれる人もいました。

「今日のゲームに何を期待しますか」

この質問には、日本人も外国人も全く同じで「自分の国が勝つこと」「白熱したゲームになること」を挙げています。

ワールドカップの報道では、自分の国を応援するのが当たり前で、他の国を応援するなどあり得ないというのが常識のように伝えられていましたが、実は必ずしもそうとは限りません。イングランド対ブラジル戦の時、エスニックフードのレストランに行くと、そこにはペルーやチリ、パラグアイなど南米圏の方がたくさんいました。皆でブラジルの応援をしているので詳しく話を聞くと、「南米人にとって自分の国を応援することは当たり前だけど、やっぱりブラジルは別格だよ。大好きだ」ということで、皆当然のように自国以外の国 セカンド・カントリーを持って応援していました。

先ほど見ていただいたフラッシュ(動画)の中にも、

マレーシアやカナダなど今回の出場国ではない国のサポーターが映っていました。彼らにとってセカンド・カントリーを応援することは何も不思議なことではありませんでした。日本人がイタリアやイングランドを応援することに海外から疑問が出ていましたが、こうした第3国の人たちと交流すると、何もおかしいことではないなと実感しました。

ブラジル人が他の国を応援していたら私自身、違和感を感じるかもしれませんが、しかし、実際はどこかの国が好きだろうとどこを応援しようと、それは人それぞれ、それが本音でしょう。

サッカー以外にも大切なものが

「あなたの国が世界に誇れることは何ですか」

ここではナショナルチームや国の名物をあげる人が多かったです。

「あなたが知っている日本人の名前を教えてください」

中田英寿を筆頭に稲本、小野伸二らサッカー選手の名前を挙げる人が圧倒的でしたが、日本に長く住んでいる方や何度か出張経験があるという方は、サッカー選手以外を上げている人が多かったです。

「世の中で最も大切にしているものは何ですか」

家族、健康、ガールフレンドといったパーソナルな回答が多く、当初予想された「サッカー」と答えている人は意外に少なかったです。

「あなた自身が最も憎んでいるものは何ですか」

ここに今大会を象徴する回答を見た気がします。これは去年ニューヨークであったテロ事件の影響からでしょう、「戦争」「暴力」「テロリズム」という回答が多かったです。

それ以外の回答はというと、日本人ではパイロン社。セルビア人にはクロアチア人と答えている人もいて、これも戦争の影響かなと感じました。

日本人に「94年のワールドカップはどうだった？」と聞けば、ドーハの悲劇の話が真っ先に出てくるでしょうけれど、例えばブラジル人に聞けば、「あの年の春にはアイルトン・セナが死んでしまった。皆ガックリきているところでアメリカ大会に優勝できてよかった」という

答えが返ってきます。主催のアメリカ人に尋ねれば、開幕戦の時にアメフトのO・J・シンプソンが高速道路でカーチェイスを繰り広げていて、そちらの方が気になった、などと答える人が多いです。

「今大会はどういう大会だったか」

日本人にとっては初めてセカンドラウンドに進出した大会、韓国にとってはベスト4入り、とつづられるのですが、世界的には多くの人にとってはテロ事件の後のワールドカップということになるのかもしれませんが、そうして「戦争の後の大会」として考えると、今大会は非常に友好的・平和的に出来たのではないかと思います。

「日本に来て一番ビックリしたことは何ですか」

この質問に対して「人々が親切である」と答える人が多かったです。先ほど木下さんもおっしゃっていましたが、「日本って意外にイイ国じゃん」という感じがここに表れていると思います。「英語が通じない」「暑い」というのは仕方ないかなと思いますが、でもコミュニケーションが取れるようになれば改善されることかもしれません。言葉が通じなくとも実際には何らかの形で一生懸命に会話をした人がいたので、これが「親切」という印象につながったのでしょう。

その他、「マスコミ」を挙げる人もいました。日本の加熱報道ぶりは、外国の人からするとやはり異常なものに見えるのだなと興味深く感じました。

日本滞在が長い人はそれなりに“日本観”があるようで、「光がまぶしい国である」などユニークな答えを出した人も少なからずいました。

「日本に来て何か困ったことはありますか？それはどんなことですか？」

今大会には恐らくたくさんの不備があり、数多くの答えが返ってくるであろう。それを改善点として次につなげようと思っていましたが、半分近くの方の答えは「特に無し」。あったとしてもそれは言葉の問題や物価など聞かずとも明らかだったことなので、不満な点が特に無いということなのか、大会のあり方について大きく問題意識を持つとしないだけなのか判別がつかないところもありますが、大会運営についての批

判は出ませんでした。

「新潟にバーが少ない」という答えもありました(笑)。実際の数とはかく、海外の方、特にアイルランド人やイングランド人が試合の前後にビールを飲む姿を皆さんもご覧になっていると思いますが、彼らにとってサッカーとバー、パブというのは付き物です。そうした場所であれこれ語るのはサポーターにとって大事なことで、そこでコミュニケーションを取れるということが、サッカーの一番楽しいところではないかと思います。

今回、たくさんの日本人が居酒屋やパブで多くの人と一緒にサッカーを楽しんだことでしょう。そういった文化が日本にも根付くといいなと感じています。

「帰国後、家族や友人に日本のことをどう話しますか」

これに関しても良い答えが多数で、先ほどの質問から受ける印象が続きました。

「ワールドカップだけでなく様々なことが衝撃的だった」と言っている人もいます。「思っていたのは違う国だった」という印象も、プラスの良い印象で持ち帰ってもらえた。それが今回のワールドカップの一番の成果でしょう。

「あなたにとってワールドカップとは何ですか」

これが最後の質問です。「人々が1つになる」「自分にとって全て」という答えが非常に多かったです。サポーターにとってワールドカップが特別なものであるということが、こうした回答から見えてきます。

デジタルカメラが大きな武器に

アンケートを実施した人に話を聞くと、「何とかしてサポーターの方と触れ合うきっかけが欲しかった」という人がとても多かったです。今回実際にやってみて、150通ものアンケートが集まったのには、まずデジカメを持って「写真を撮らせて下さい」と声を掛けたことが大きかったと思います。そうすることで相手も「どうぞどうぞ」という感じで親しくなれました。コミュニケーションのツールとしての写真の存在が大きかったです。

海外のサポーターが特に驚いていたのは、写メールでした。携帯電話で写真が撮れて、しかもその写真をすぐに友達に送信できるということに、少なからぬ

人たちが驚いていました。そこから、「それ何、何？」と会話が始まり、身振り手振りでも何とかコミュニケーションを取ろうとする。それをサポートしていたのが写真でした。

実際にやってみて気付いたこと(アンケート実施者)

これには「語学力不足は何とかなった」と答えた人が非常に多く、ここで改めて写真の存在の大きさを感じました。しかし、残念なことに、そこから一歩踏みこんだコミュニケーションをとることは少しハードルが高かったようです。

アンケートに答えてくれた外国人サポーターのうち67%もの方がメールアドレスを持っていたのですが、デジカメで撮った写真をアンケートに答えてくれた外

国人サポーターにメールで送ったという人は1人しかいませんでした。「メールだと簡単だから、あとで写真を送ろう」と思っていたも、いざ送るとなると「写真を見てください」と英語で書くのはちょっと面倒くさい。抵抗がある。自信が無い。そんなところにつながっているようです。ですから今後、サポーターズプロジェクトでは、協力してくれた人にお礼を出していこうという「写真キャンペーン」のようなものを行い、そこから深いコミュニケーションにつながっていけばいいなと思います。

こういった経験をもとに、2004年にポルトガルで行われるEUROや、中国でのアジア大会の時にも同じような形でやっていくことが出来ると思います。とても楽しいプロジェクトですので、本日これを機会に興味を持った方がいましたら、ぜひ参加してください。

中塚 1つの新たなアプローチとしてのサポーターズプロジェクト2002の紹介でした。

橋本さんご自身も国内10会場すべてを回られたそうなので、会場の様子などを後ほどのディスカッションでお聞かせ頂けたらと思います。

さて、最後のシンポジストは、先ほどより再三名前が出ております写真家の宇都宮徹彦さんです。宇都宮さんの作品は神戸ファッション美術館1階のサッカーユニフォーム展でも紹介されています。

「メディアが伝えた2002年大会 ~インターネットが伝えた2002年大会~」

宇都宮 徹彦((株)スポーツナビゲーション/写真家)

これから私がお話しするのは、「メディアが伝えた2002年大会」。そして、「インターネットが伝えた2002年大会」というサブタイトルを付けてみました。

(注:以後、映像使用)

この写真は韓国の光州(クアンジュ)のスタジアム、韓国がPK戦の末、スペインを破り、ベスト4に進出した試合のスタンドの様子です。ご覧の通り、巨大な大極旗が掲げられています。これから私がお話しすることは、タイトル、サブタイトル、そしてこの写真で大体察しがつくかと思います。

2002年大会において、メディア・マスコミがどのような役割を果たしたか、あるいは果たさなかったのか。今大会におけるメディアを検証する場合、色々な切り口が考えられます。

メディアという巨大なものと、ワールドカップという巨大なもの、この2つを1度に論じるには、なかなか一

筋縄ではいきません。先ほどから話題になっていた「過剰なフリーガン報道」、マスコミがあつたことでより大きな混乱を引き起こした「チケット問題」、「日本代表、トルシエジャパンをめぐる報道」など、検証していかなければならないテーマは多岐にわたります。

今回、限られた時間の中で私が選んだテーマは、「共催国・韓国に関する報道」についてです。これには、いわゆる「誤審問題」も絡んできます。それらをメディアがどう伝え、逆に何を伝えなかったか。情報の受け手である視聴者や読者は、それらの報道をどのように受け止めたのか。その中でインターネットがどのような役割を果たしたか。そういった事柄についてお話ししたいと思います。

なぜ韓国を“応援”するのか

さて、今大会において、インターネットは非常に大

きな役割を果たしました。もちろん4年前の98年大会にもインターネットはありましたが、ユーザーもそれに存在していたわけですが、この4年間でユーザー数が格段に増加しました。私自身、98年大会の時に初めてメールアドレスを作った記憶があります。

あれから4年。インターネット・ユーザーの増加に伴い、サッカーを語る場も増えました。それが、この2002年大会で、どのような役割を果たしたのか、これから検証したいと思います。

「共催国・韓国を応援しましょう！」。今大会では、日本の大多数のメディアがこのようなキャンペーンを張っていました。

私は、韓国がベスト4に進出する直前には現地で取材していましたから、日本のメディアの状況については、インターネット上でしか確認できませんでした。むしろ会場にいらっしゃる皆さんの方が、当時の状況についてよくご存知かと思います。

「共催国・韓国を応援しましょう！」 もっともな主張のように聞こえます。

同じ共催国なのだから、しかも日本はもう負けたのだから「韓国を応援しましょう！」。ある意味で、説得力のあるフレーズのようにも思えます。しかし、私自身を含め、多くのサッカーファンには、実に納得できない主張であったことも事実です。

先ずサッカーファンとしての感覚からすれば、韓国は長年日本に煮え湯を飲ませてきたライバルです。なぜライバルに塩を送るような真似をしなければならないのか。私も頑固なのですが(笑)、オールド・ファンにはそういう人が多いです。

一方で、韓国になかなか勝たせてもらえなかった時代を知らない若者世代の中には、日韓のサポーター同士での交流があり、韓国を応援する日本人も確かに存在していました。しかしながら、インターネット等を通して漏れ伝わってくる現地の情報に接して、彼らもまた戸惑いを覚えずにはいられなくなります。「あれ？韓国は実は日本の敗戦を喜んでいたの？」とか、「韓国のサポーターって、結構えげつない応援をするのだな」といった、日韓共催という共同幻想を打ち砕くような情報がインターネット上で広まっていく中、それでも日本のマスコミは「韓国を応援しましょう！」と喧伝し続ける。既成メディアの情報とインター

ネットの情報のかい離は、次第に顕著なものになっていきました。

韓国では、まるで単独開催

ここで時系列的に整理しましょう。6月15日、決勝トーナメント 1戦目についで言ってしまうね(笑)。セカンドラウンド1戦目に宮城で日本はトルコに敗れてしまいます。同日夜、韓国が延長戦の末、イタリアに勝利。私は宮城で日本戦を取材して、それから新幹線で帰京したものですから、リアルタイムでこの試合は見えていません。ともあれ、この時点では韓国のベスト8進出の衝撃よりも、むしろ「日本のワールドカップも終わったな」という少しセンチメンタルな気持ちがファンの間では強かったように思います。

日本がトルコに敗れ、韓国がイタリアに勝った。この時点では日本の多くのファンはやはり日本が敗れたことの方に心を奪われていました。当然といえば当然です。常日頃、セリエAに慣れ親しんでいる人の中には「あんなひどいラフプレーがよく許されたな」という声もありましたが、「イタリアに勝った韓国はすごい」という意見の方が多かったように思います。

いずれにせよ、6月18日の時点では、多くの日本人は「韓国のベスト8進出」よりも「日本の敗戦」を引きずっていました。この状態は大体22日ぐらいまで続きます。私は19日に韓国へ渡り、現地で取材をしていたのですが、この時点ではまだインターネット上でも「嫌韓ムード一色」ではありませんでした。

一方で日本のメディアは、「感動をありがとう！トルシエジャパン！」というようなメッセージが一段落してから、こぞって「韓国を応援しましょう！」というムードにシフトしていきます。大体18日から22日の間に日本のマスコミは「トルシエをめぐる物語」から「共催国・韓国をめぐる物語」へとシフトしていったわけです。

この「韓国を応援しましょう！」というメディア・キャンペーンについては、先に述べた通り、私は大いに違和感を覚えていました。そもそもサッカーの世界において、「～を応援しましょう！」という言説は明らかにナンセンスだからです。

日本に生まれ、日本で育った。だから日本代表を応援する。韓国に生まれ、韓国で育ち、韓国を愛している。だから韓国代表を応援する。これは当然の

話ですね。先ほど橋本さんのお話の中にあつた「セカンド・カントリー」についても、よく理解できます。私も今大会では東ヨーロッパの国、クロアチアやロシアなどにはセカンドラウンドへ上がって欲しいなという気持ちがありました。セリエAを観ていた人はイタリアを応援するでしょうし、ベッカムが好きな女の子はイングランドを応援するでしょう。それはそれで「あり」だと思うのですが、「～を応援しましょう！」というのは、これはサッカーの文脈から大きく逸脱していると言わざるを得ません。

冒頭に賀川さんがお話しされたように、メディアの指導者がサッカーというものを理解していないことからこうしたメッセージは生まれてきたのではないのでしょうか。加えて、日本は「日韓共催」という理念にあまりにも拘泥していたために、「韓国を応援しましょう！」となったのでしょう。

しかし、一方の韓国には、実際のところ「分催」という認識しかなかった。私は3位決定戦まで韓国にいたのですが、現地では共催国であるはずの日本の情報は全く入ってきませんでした。テレビを見ていると、ワールドカップは日韓共催ではなく、韓国で単独開催されているような錯覚に陥ってしまう。それくらい日本の情報は隔絶されていて、結局はインターネットで検索するしかありませんでした。

そして問題の6月22日、韓国はスペインに勝利してベスト4に進出します。私は現場で取材をしていたのですが、ゴールが取り消されたシーンについては、やはり疑問を持っていました。特に延長2分。ホアキンがクロスをあげてモリエンテスへ、というところで「ゴールラインを割った」という判定が出た時、記者席は大騒ぎでした。スペイン人はもちろんのこと、南米から来ているスペイン語圏の人たちは大ブーイング。本当に騒然としていました。私も隣にいた日本人記者と「今のは何で取り消されたのですかね？」という感じで、全く理解できなかつた。後になって、「どうやらゴールラインを割ったらしい」という情報が入ってきましたが、ビデオを見る限り、やはり割っていませんでした。

ところが、翌日インターネットで検索すると、日本のメディアはこの「誤審疑惑」について全く触れておらず、それどころか韓国賛美一色の報道でした。ただし、後で知ったことですが、例外もいくつかありました。そ

れはジーコやストイコピッチ(ピクシー)といった外国人の解説者たちでした。彼らはあの時点で「この判定はおかしい」と断言していて、その後、雑誌でも明言しています。特にピクシーは、「こんなことが2度も3度も続くのは絶対におかしい」と、暗に意図的な誤審ではないかと指摘しています。

ご存知の通り、彼は名古屋グランパスを引退した後、ユーゴスラビアサッカー協会の会長を務めています。ユーゴのサッカー界はこれまでマフィアに牛耳られていて、審判の買収も八百長も当たり前という由々しき状態にあつたのですが、彼はそうした悪しき慣例を正そうと、大改革を断行している最中でした。そんな彼だからこそ、この判定に強い違和感を憶えたのでしょう。

誤審疑惑から嫌韓ムードへ

さて、ここでいきなり飯島愛ちゃん登場です。

「飯島愛ブチ切れ！もうキムチ食べない！！」これは22日の出来事らしいのですが、TBS系の朝の番組で、彼女が韓国を徹底批判しました。「もうキムチ食べない！！」と、タイトルからして子供じみてるので、「飯島愛がまたバカなこと言っているよー」とも取れるのですが(笑)。よくよく読んでみると、実はいくつかとても的を射た発言をしているんですね。

「どのテレビもトッティの退場プレーを良く分かる背後から映像を短くカットしている。ズルイよ！ 競技場の横断幕『アズーリの墓場へようこそ』というのはいいいわけ！？ 相手に対して礼儀がないのはおかしい！」

けっこう真っ当なことを言っているじゃありませんか。彼女がどれほどサッカーを知っているのか、私は全く知らなかつたのですが、良い悪いは別として、少なくとも、この時点で韓国における大会のあり方について「NO」と言ったのは、おそらく日本人で彼女が初めてだったと思います。

で、この彼女の発言のタイミングが、また絶妙だったので、なぜなら、この番組の直後に韓国対スペイン戦が行なわれているのです。この「飯島発言」をどれだけの人が見ていたかは分かりませんが、これがネット上でバツと広がったことだけは事実です。

「飯島発言」を知ったサッカーファンは、「次の韓国の試合はどうなるのだろう」とスペイン戦を注視してい

たわけです。そこで、あのような誤審が起こった。この日、22日というのが「誤審疑惑」から「嫌韓ムード」へと発展する1つのターニングポイントになったわけです。

飯島愛の発言を「日本人の本音」とするならば、次に登場する明石家さんまの言動は「サッカーファンの本音」と言えるでしょう。

29日の準決勝・韓国対ドイツの時のことです。彼は「どこを応援したってええやないか！」と言ってドイツのユニフォームを着て番組に出演していました。

韓国のメディアは、同日に国立競技場で行なわれたパブリックビューイングのニュースと共に彼の言動を取り上げ、「多くの日本人サポーターがドイツを熱狂的に応援し、共催応援という行事の意図を台無しにした」「日本で試合を生中継した番組に出演した男性タレントがドイツ代表のユニフォームを着ていたためひんしゅくを買った」と伝えています。私はこのニュースで、さんまがサッカーファンの心情をきちんと宣言したのだなと思い、ちょっと彼を見直しました。

で、ここで注目すべきは、一部の日本人が(韓国でなく)ドイツを応援したことを韓国側が非難していることです。これはちょっと奇妙な話でして、韓国人の人々も(一部だったかもしれませんが)日本が失点した時やトルコに負けた時に、皆で喜んで拍手していたわけです。少なくとも一般的な韓国人の間では「日本には勝って欲しくない」、さらにいえば「日本には韓国よりも良い戦績を収めてほしくない」という韓国人の本音があったということです。この事実を日本のメディアはほとんど伝えていませんでしたが、日本のファンにはネットを通してかなり広まっていました。

つまり、日本のファンの偽らざる気持ちを代弁すると、こうです。「韓国は日本の敗戦を喜んでいたのに、自分たちがドイツを応援するのはどうしていけないのか」、そして、「そんな韓国に対してメディアはなぜ『共催国・韓国を応援しましょう!』と喧伝するのか」。

スペイン戦が行われたのは22日。そしてドイツ戦は25日。この3日間で、メディアと受け手のかい離が決定的になりました。この、わずか3日間で、インターネット上におけるBBSの書き込み、苦情メールなどがピークに達し、ネット上に漂う嫌韓ムードは非常に深刻なものになってゆきます。

つまり、こういうことです。これまでメディアに対して漠然とした不信感を持っていたファンが、スペイン戦を契機として、もはや既成メディアが信じられなくなり、なだれをうってインターネットに流れ込んだわけです。今大会でこうした現象が起こったのも、4年前とは比較にならないほどパソコンが普及していたこと、ネットのユーザーも増加していたこと、そしてサッカーを語る場がインターネット上に広がっていたことが要因だったと思います。そこでは、痛烈なメディア批判と共に、非常に深刻な嫌韓ムードが形成されていきました。

ここである掲示板を1つご紹介しましょう。

「報道規制 6月23日 23時41分」

『日テレ、NHK、フジ、テレ朝と、今夜のサッカー番組を立て続けに見ていますが、ライン際の幻のゴール場面(ホアキンのセンタリングの映像)は皆無のようですね。昨晚までの方がまだ規制が緩やかだったような気がします。スペイン戦も、1試合を通じて韓国が一方向的に圧しているかのような場面が強調されているし、こういう編集を丸ごと信じて誤りじゃないですよ?』

「太鼓持ちマスコミ」

『FIFAに抗議が世界中からきています。(その数)40万通なのに、この国のマスコミは隣国を賛美しております。かの国はホスト国足り得ませんでした。相手国を罵倒し、関係のない試合で自国をコール、客席はガラガラでタダ券をまいている、などなど実際にあったことです。品格のあったワールドカップを返してください。後々、史上最低の大会と言われるのは必至です。その時は日本を共催国とは書かないで下さい。迷惑です。』とまあ、かなり辛らつなことが書かれていますが、これらはまだ冷静な方です。もう目も当てられないような罵詈雑言が、この期間にネット上ではあふれ返っていました。

さて、こちらの画像は、準決勝のドイツ戦当日にオリバー・カーンとクロゼの写真が韓国の熱狂的なサポーターによって「遺影」にされてしまったものです。「カーン選手、負けてください」と翻訳されていますが、実際はもっと辛らつな言葉が書かれていたそうです。

それから、ナチスの鍵十字を掲げたメッセージもあったようです。イタリア戦の時にも「ファシスト云々」といった垂幕があったそうですが、本来こうした政治的

なメッセージをスタジアムに掲げることはFIFAが禁じていますし、それ以前に、ドイツ人にとって、ヨーロッパ人にとって、この鍵十字が何を意味するかは、ちょっと想像すれば分かることだと思います。このようなメッセージが、ワールドカップの場に出てくること自体が異常です。このことについても、日本のメディアはほとんど報じていませんでした。

もっとも、この鍵十字が試合中ずっとスタンドで掲げられていたというわけではありませんでした。というのは、私もドイツ戦が始まる前に「変なメッセージはないかな」と双眼鏡で一生懸命チェックしたのです。一記者でしかない私が、何でこんなことを心配しなければならないのか、と思いつつも(笑)。幸い、スタンドでは鍵十字は見ませんでした。その前に、市庁広場(シティホール)のパブリックビューイング会場では、露骨なドイツ批判の看板を見ていました。

ここで問題なのは、こうした行き過ぎたサポートもさることながら、日本のメディアがほとんど触れていなかったこと。その代わりに、インターネット上にこうした情報が半ばゲリラ的にはんらんし、それを見た人々が既存メディアよりもインターネットを信じるようになってしまったということだと思います。

「日韓共催」に拘るメディア

「反メディア」、そして「嫌韓」というネット上でのムーブメントは、ただ単に伝えることに終わらず、やがてヴァーチャルからリアルの行動へと移行していきます。

6月25日、先ほど申し上げましたとおり、国立競技場で準決勝、ドイツ対韓国のパブリックビューイングが行なわれました。これも、よくよく考えればおかしな話です。パブリックビューイングは本来、日本代表の試合と、キャンプ地における当該チームの試合に限定されていたはず。それなのになぜ、国立でそれが行なわれなければならないのか。

もちろん、東京にも在日韓国人の方がたくさんいらっしゃいますから、そうした方たちに場所を提供するという理屈も分からなくはありません。とはいえ、日本のサッカーファンにとって国立競技場は「聖地」であるわけです。なぜ「聖地」で韓国を応援しなければならないのか、という感情が噴出するのも無理もないことだと思います。

話を戻しましょう。国立でのパブリックビューイング開催が決定した時、とある掲示板が「皆でドイツを応援しよう！」と呼び掛けました。すると、1000人くらいのファンが、雨が降る国立に集結しました。しかも、彼らはただ集まっただけではありませんでした。

このパブリックビューイングをレポートしたホームページによると、その日のパブリックビューイングは、とある政治団体の議員が韓国寄りの報道にのって企画した極めて政治的なイベントであったようです。しかも韓国チームだけを応援することを目的としていて、韓国が得点したら花火を上げる予定だった。そこで有志のメンバーは「花火はとにかくやめて欲しい。韓国寄りの応援をするのではなく、花火は中止するか、もしくは両チームがゴールした時にあげるべきだ」と主張したそうです。また、実行委員会に抗議のメールや電話が殺到する一方で、ドイツ大使館には「がんばれメール」が多数寄せられたとも伝えられています。

こうした経緯が掲示板上でリアルタイムにレポートされていくうちに、別の掲示板からもどんどん賛同者が集まり、最終的に1000人くらいの規模になったということです。

私はこうした一連の出来事を帰国後にインターネットを通じて初めて知ったのですが、果たして日本ではどれくらい報道されていたのでしょうか？

ちなみに、先ほどご紹介したホームページは、以下のようなメッセージで締めくくられています。

「今回のマスコミの報道は、偏向報道というよりもマインドコントロールに近い。彼らにはもう情報発信する資格も、政府の不正を追及する資格もない。今はテレビから吐き出される言葉を全て信用できなくなってしまった。これからどんなに素晴らしい番組を作ろうとも、私たちの信用を取り戻すのは至難の業であろう。ネットが爆発的に普及している現在において、世論操作は不可能だとマスコミは気付くべきなのである」

ワールドカップというのは言うまでもなく、サッカーファンが4年に1度、指折り数えて楽しみにしている大会です。加えて今大会では他ならぬ日本で迎えられるという、まさに夢のようなイベントだったわけです。それがいつしかサッカーの言説を離れて、極めて政治的な言説ばかりで語られてしまった。それには様々な要因が考えられますが、少なくとも「日韓共催」というお

題目に拘泥するようなメディアのあり方については、今後も検証が必要であると私は考えます。

サッカーを冒とくする行為は許せない

ところでこの時、私・宇都宮は何をしていたかというところ、今大会、初めてプレスパスをもらって、スポーツナビゲーショというサイトで「日々是世界杯」という日記風のコラムを連載していました。

大会を通して、その日思ったこと、考えたこと、発見したこと、出会ったことを毎日肅々と書いていました。ところがこの連載が、スペイン戦の前後あたりからアクセス数が急激な伸びを見せるようになり、自分でもビックリしました。その原因を探るべく、大会後にヤフーで自分の名前を検索してみたところ、何とヒット数が1000件近く増えていたのです。原因は、すぐに分かりました。ネット上で個人の日記を書いている方が結構いて、大会期間中 それこそ韓国がらみの「誤審騒動」があった時に、「宇都宮のコラムを読んでスーッとした。リンク先はこちら」というものが、かなりあったわけです。

実際、私は大会期間中に韓国に対して批判的なコラムをかなり書きました。ただし、韓国や韓国人が嫌いだから批判したのではなく、あくまでサッカーファンの1人として、「これはおかしいんじゃないの？韓国！」という気持ちから生まれた批判でした。もし私たちに韓国を応援する権利があるならば、同時に批判する権利もあってしかるべきです。つまり、本当の意味で「日韓共催」であるならば、韓国で起こっていることに関しても日本人は当事者であるはずですよ。

そんなわけで私は、韓国に関してかなり辛らつな意見も書かせて頂きました。ところが、他のメディアがかの国をきちんと批判していなかったため、マイナーだったはずの宇都宮が突出した存在になってしまう

そんなおかしな逆転現象が起こってしまいました。実際、スポナビにもかなり反響があったようです。激励のメールが寄せられた一方で、「宇都宮は嫌韓ムードをあおっている」とか「宇都宮は右翼なのではないか」という批判も受けました。こんな弱そうな右翼がどこにいるのだと、ここで強く申し上げたいですね(笑)。

こうした批判に対して私が申し上げたいのは、こういことです。つまり、私の批判の対象は「サッカーの

敵」であり、「韓国そのもの」ではないということ。サッカーを政治に利用しようとか、サッカーで他者をおとしめようとか、サッカーを口実に人に暴力を振るうとか、そういったサッカーを冒とくするような行為全体が許せなかったのです。

ですから今回は、たまたま韓国で直面した出来事について自分の意見を述べたまでのことであり、韓国なり韓国人なりが憎いわけでは決してありません。私自身、現地でいろんな人たちにお世話になりましたし、親切にもして頂きました。儒教の教えに根差した彼らの礼節は、本当に尊敬に値すると思っています。ところが今回、これまで1勝もできなかった代表チームがいきなりベスト4進出を果たしたことで、敗者への礼節だとか思いやりといったものも含めて、彼らが本来持っていた美徳が一気に弾けちゃったのではないのでしょうか。

いずれにせよ、このコラムで私が言いたかったのは、「共同開催」という理念が、結局のところ幻想であった、ということです。もっと言ってしまえば、日本の一方的な片思いでしかなかった。日本では大会前からメディアが共催国である韓国をずっとフィーチャーしていましたが、かたや隣国のメディアは、日本のことをほとんど黙殺していました。一例をあげると、韓国では大会前に出場国のテストマッチをほとんど放映していたらしいのですが、日本戦は全く放送しなかったそうです。唯一の例外は、韓国が対戦するポーランドとの試合だけでした。

私は、韓国が日本を嫌いでもいいじゃないか、とさえ思っています。隣国だから仲良くしなければならぬという理屈はないと思います。スコットランドとイングランド、ドイツとフランス、ギリシャとトルコ。隣国同士というのは、たいてい仲が悪いものなのです。仲が悪くて、時々戦争もするかもしれないけれど、それでもお互いの良い所と悪い所をきちんと認識して、「YES/NO」をはっきり言えるのが、真っ当な隣国との関係だと思っています。

日韓戦(もちろんサッカーの試合です)になれば、思いっきりブーイングし合えばいいし、日本がトルコに負けた時に彼らが拍手をしたって、それは本来的にはOKなのです。そんなことにショックを受けて、「裏切られた」と思うのは片思いのせいなのです。日韓両国

が、本当に真っ当な関係になるまでは、別にお互いのことが好きではなくても、それはそれで自然なことだし、無理して仲良くなろうとするのはかえって逆効果なのではないかと思います。

それから日本のメディアについて、もうひとつ指摘するならば、メディアはサッカーファンの信仰の自由を侵害すべきではありません。「～を応援しましょう！」という言説は、まったくもってサッカー的ではない。サッカーの報道に携わるのであれば、サッカーの歴史・文化、そしてサッカーを愛する消費者の心情をもっと勉強して頂きたいものです。

インターネットメディアの危険性

ところで、インターネットというメディアは、本当に既存のメディア以上に信用できるものなのでしょうか。確かにインターネットには、スピード感があり、一般の人もどんどん参加して発言できる双方向性があり、さらに言えば、出会ったことのない人同士を簡単につないだり、人間関係の上下に関係なくダイレクトにメッセージの送受信ができたりと、それ以前には考えられなかったような様々な利点があるのは事実です。しかし、その一方でこれまで想像もしなかったような危険性もはらんでいます。

今回のワールドカップに関して言うと、こんな事件がありました。

皆さんの中で「ヨン・ダール・トマソンと少年の物語」をご存知の方はいらっしゃいますか？

トマソンというのは、今大会に出場したデンマーク代表の選手で、当時の所属クラブはフェイエノールト小野(伸二)の同僚ですね。今季、ACミランに移籍した優秀な選手です。ワールドカップが終わった後の7月10日、彼の「知られざるストーリー」なるものがインターネット上で一斉に流布されました。どんな話か、簡単にご説明しましょう。

デンマーク代表チームのキャンプ地・和歌山で、地元の子供たちとの交流会が開かれ、そこに耳の不自由な少年が母親に付き添われてやってきました。彼が英文で「僕は生まれつき耳が聞こえません。頑張ってください」といったメッセージを渡すと、トマソンは少年と手話でコミュニケーションを取ろうとしたらしいのです。何と、トマソンは手話のできたのですね。たいてい

の読者は、まずここで感動します。

ところが、手話というのは外国語(口語)と同じで、デンマーク人と日本人ではコミュニケーションが成り立たない。それをある人に指摘され、トマソンは「実は僕にも耳の不自由な姉がいてね。君の苦しみは君1人のもんじゃないで、家族皆で背負っている試練なんだ。でも頑張るんだよ」と、通訳を介して伝えました。その様子を見ていた人たちは皆、涙ぐんでしまったそうです。さらにトマソンは「僕は君のために頑張る。少なくとも1ゴールは決めるからね」と少年に約束し、最終的にワールドカップで4ゴール決めました という感動的で、ある意味、とても出来すぎた話がインターネット上に流布したわけです。

この「トマソンの物語」は、それまで全くマスコミに報じられていなかった物語でした。これを書いたのは、関西系のスポーツ記者だったそうです。ただし、サッカー担当者ではなく、ずっと阪神タイガースを追っていた方で、仕事ではなく個人のホームページで、あくまでも「個人の趣味」として書かれたものでした。それを誰かが、あちこちにリンクを貼りまくって、すぐにネット上で大騒ぎになりました。

多くのサッカーファンは、この物語にものすごく感動したんですね。ワールドカップでは嫌なこと、不愉快なことも少なくなかったけれど、これは素晴らしい話じゃないか。マスコミはどうしてこういう話を伝えないのか

ということでネット上で一気に広まっていったのですが、この物語には非常に残念な、そして怖い結末が待っていたのです。

まず、この物語をホームページに掲載した記者に「そんな話があるわけないだろう」と誹謗中傷メールが大量に送られるようになりました。さらに被害は彼の職場にまで及びます。彼が勤める新聞社に、匿名の読者から「～～という話を書いた記者はそちらにいませんか」という電話がかかってきたそうです。しかも、同様の電話が在阪の新聞社に一斉にかかってきて、騒ぎは同業他社にまで広がりを見せるようになりました。

結局、この記者は息子さんの名前をハンドルネームに使用していたため、「原因はお前か？」とバれてしまい、上司から「他社の新聞記者さんに迷惑がかかったから、俺は局長全員に詫言を入れた」と言われ

たそうです。

さらに、匿名の人物は和歌山県庁にまで「こういう耳の不自由な少年を知りませんか？」という電話をかけていたらしく、最終的にこの記者には、5日間の謹慎と1カ月の減俸という処分が下されました。この方のサイトは現在も運営されていますが、「トマソンの物語」の部分はご本人の判断で閉鎖されてしまいました。

「トマソンの物語」は、それ自体は感動的ではあったわけですが、これにインターネットの匿名性が付加されたことで、にわかにも恐ろしい話へと変質しました。ホームページの作者の預かり知らぬところで、物語が1人歩きを始め、結果的にネットの匿名性が、一般社会の秩序を無視した行動につながってしまったわけです。この匿名の読者がなぜ、あちこちに電話をかけてきたのか、動機は不明です。しかし、どう考えても気持ちが悪い、迷惑な話ですよ。インターネットの世界には、こういった思わぬ事件や事故を起こしかねない危険性が常に潜んでいます。

インターネットは確かに便利だし、今までのメディアのあり方を変える可能性を秘めているかもしれません。しかし、素晴らしい可能性がある一方で、思いもよらぬ危険も確実に存在するというのも、私たちはしっかり認識しなければならないと思います。

進化する読者に対するメディアの使命

最後に、今後のスポーツ・メディアのあり方について、簡単に触れておきたいと思います。

ここで登場するのが、『週刊女性』です。「嫁に煮えたぎった味噌汁をぶっかけた老舅」というオドロオドロしいタイトルの隣で、すてきな笑顔を見せているこの若者が、今、大ブレイク中のイルハン選手（トルコ代表）ですね。

現在、ベッカムの本が売れているのは皆さんもご存じかと思いますが、類似本が既に4冊は出ていて、書店には本が平積みになっていますね。

その一方で、密かに人気を集めているのが、トルコ代表のイルハンです。セネガル戦で延長Vゴールを決め、(3位決定戦の)韓国戦でも2ゴールを挙げました。ベッカムに飽きた女性たちが、「あら、このコ、かわいいいじゃない」ということで注目が集まり、大会後に

大ブレイク。「ベッカム応援ツアー」に続いて、最近企画された「イルハン応援ツアー」でも応募が殺到しているそうです。

ここで、私が何を申し上げたいかと言いますとワールドカップが終わった今、我々「伝える側」が考えなければならないことは、新たに獲得したファンと、進化した視聴者・読者に何を供給すべきか、ということです。

新たなファンというのは、つまり『週刊女性』の読者、女性です。そもそも、女性週刊誌にベッカムが載り、イルハンが載るなんて、誰が想像できたでしょう？でもこれが現実なのです。もちろん、彼女たちの大半は「にわかサッカーファン」であることは言うまでもありません。でも、私たちは「にわか」を無視すべきではないと思います。むしろ、この「にわかサッカーファン」あるいは「ミーハー」と呼ばれる彼女たちを、私たちの仲間にする、言い換えれば、きちんとマーケットに取り込むことが大切です。そうしなければ、いつまでたってもスポーツはマーケットとして成熟せず、文化として根付くことはないでしょう。

その一方で、進化した読者に対しても配慮が必要だと思います。いつまでもスター選手の物語に拘泥していて良いのでしょうか。最近の例として、「中田も感激、ベッカム初対決」というスポーツ新聞の記事を紹介しておきます。

これは先日のマンチェスター・ユナイテッドとパルマとの試合、3 - 0でユナイテッドが勝った試合ですね。ここでも、中田英寿なり、ベッカムなり、とにかくスター選手をクローズアップしなければ記事が書けないという、昔ながらのマスコミのお粗末さを見ることができません。いい加減に、こういう状態から脱却しないと、既にこのレベルの記事にあきあきしている読者や、専門誌にさえも満足できなくなっている読者は、どんどん離れていくことでしょう。彼らが本当に求めているサッカーの情報や読み物は、もはや一般スポーツ紙には望むべくもありません。

新たに獲得した読者と、進化した読者。私たち「伝える側」は、その両方を満足させるものを作っていくべきでしょう。

そろそろまとめに入ります。今大会では、インターネットの普及によって、メディアは、もはや情報操作でき

なくなってしまったという事実が、白日の下にさらされることになりました。メディアに携わる人間は、この事実を謙虚に受け止めなければなりません。ところがメディアというのは、今回のフーリガン報道を見ても明らかのように、自分が言ったことに対して責任を持たない傾向があります。反省をしない、忘れてしまう。けれども、メディアは忘れるかもしれませんが、受け手は絶対に忘れません。今大会においてメディア側と受け手がこれ程までにかい離してしまったという状況を、彼らは決して忘れることはないでしょう。

まずは「伝える側」が、この事実を謙虚に受け止めるところから始めなければ、信頼関係の崩壊はどんどん広がっていくことでしょう。私自身、メディアから発言する人間ですから、今回は天に唾を吐くようなことを申し上げているわけですが、それだけ深刻な問題であると考えています。

何やら重苦しい雰囲気終始してしまいましたが、以上で話を終えたいと思います。

中塚 観戦と交流の物語に付き物と言いますが、非常に重要な要素を持つメディア、特にインターネットの間の部分を中心にレポートして頂きました。

ディスカッション

中塚 賀川さんによる基調講演、3名の方によるプレゼンテーション、その全てに「メディア」という言葉が登場し、観戦と交流の物語を伝えるツールとして、あるいは交流を促す存在として捉えられていました。

賀川さんの講演においてはメディアが正確に言葉を使わず「決勝トーナメント」という言葉がまかり通っているというお話。木下さんのお話ではフォーリガン報道が誤った英国人観を植えていること。橋本さんのプレゼンではサポーターズプロジェクトを通して、今度はそれぞれが持っているデジカメというパーソナルメディアが観戦と交流に非常に役立ったというお話。最後の宇都宮さんからは新しいメディア“インターネット”の危険性などが報告されました。

賀川さんはメディアの世界で大変長い間お仕事されているわけですが、特に宇都宮さんのプレゼンテーションに関して何かコメントを頂けますでしょうか。

賀川 私は1952年から産経新聞にいまして、最後はスポーツ新聞の編集局長を10年ばかり務め、90年からフリーランスの記者となりました。ですから、フリーランスとしてのキャリアは、まだ12年しかないのです(笑)。とはいえメディアの世界には長くて、大きなメディアも小さなメディアも経験しています。

例えば、サンゴ礁を保護しようという熱意ある朝日新聞のカメラマンが、自分たちで傷をつけてそれを撮影して、後になってその“やらせ”がバレて大恥をかき、編集局長がお詫びを出したことも知っていますし、昭和20年代に共産党と架空の記者会見をでっち上げた記者がいて編集局長が大恥をかいたことも知っております。私どもでも、記事の間違ひのために相手に迷惑をかけ、僕自身が謝罪に行ったこともあります。

メディアで一番重要視されるのは速報性ですね。新聞は活字なので一拍置きますが、テレビの方が速い、インターネットはもっと速い。

メディアは前日にあった事象を翌日新聞にするわけですが、その積み重ねをもう一度自分で検証するということが実際には出来ていないですね。それは問題だと思えます。

自分たちが自分の新聞の中で伝えてきたことをもう1度、例えばワールドカップの2ヶ月前から振り返って、自分たちが何を伝えてきたのかを検証すれば、また色々なことが出来るのですが……。

新聞は昔から「特ダネを抜いても抜かれても、翌日は弁当の包み紙」と言われてきました。まあ今は弁当を新聞紙で包む人はいないでしょうけれど、我々が入社した頃は、冬は新聞紙が一番保温効果がありましたから、新聞紙が弁当の包み紙でした。今でこそ記録性の面で残されていますが、以前は、どんな記事を書こうと翌日は弁当を包んで終わってしまうのだと言われました。

インターネットに関しては、私自身ホームページを持っているのですが、あちこち見て歩いたりそんなにしない。インターネットのホームページ上でやり取りするということで、嫌韓問題の話が出ましたが、そのように新聞やメディアに載っていないものが公表されると、それに賛同する人がワッと来るのですよ。だいたいにして、反対する連中の声の方が大きいです。

日経新聞に武智君という記者がいます。アトランタ五輪の時、日本がブラジルに勝ったと電話をかけてきて彼が大喜びするものだから、「そりゃ、たまにはブラジルだって負けることはあるし日本が勝つことだってあるよ」と言ったのです。ファーストラウンドのリーグ戦は2試合目が重要であって、1つ勝ったら次は最低でも引き分けないと上に上がれないよ、そういう目で見なければアカンよと言ったのです。彼が正直にそのことを書いたら、翌日から「せっかく勝って喜んでいのにどうして冷や水をさすんだ！」という投書がワッと来たそうです。彼が自信を無くしていたので、「賛成する人は手紙を送ってこないよ。反対する時に便りをよこすものだよ」と言ったのです。

ですから、嫌韓感情の問題も、僕たちのように長く付き合っている者からすれば歴史がありますから、あまりに長くて、ここでは言えないほど色々あるのですよ。

早い話、イングランドとドイツのようなものです。96年のヨーロッパ選手権の時、あの時のイングランドファンはものすごく立派だったし、ドイツも節度があつて立派だった。ドイツがイングランドとの準決勝にPK戦で勝ち、決勝も

勝った。その時に車の中で英国人の友だちと色々話をしていたところ、運転しながら話を聞いていた女性が最後の最後に「それでもやっぱりドイツには勝って欲しかった！」と一言。これは英国人の本音中の本音ですよ。その試合の前には、タブロイド紙がドイツ対イングランド戦を戦争になぞらえ、ナチスの話を持ち出して風刺したのです。それをタイムズ紙は社説でたしなめていましたね。

同じく 96 年のイングランド対スコットランド戦のエピソードもあります。普通サッカーの試合では対戦相手を opponent (相手) と言い、enemy (敵) という言葉は使わないのですが、その時のタブロイド紙はわざわざ、「auld enemy」という言葉を使っていました (auld は old の古語)。その時のイングランドとスコットランドは、auld という古語を使って、過去の敵対関係を完全に古い話にして楽しみ、サッカーそのものの対抗意識をあおることが出来る関係になっていたということですよ。

日本と韓国はいつになったらそういう関係になれるかなと、記事を見ながら思っていたのを憶えています。長い目で見ると、そのように色々な見方ができるのですよ。とまあ、ちょっとだけ申し上げておきます。

中塚 フロアーの方からもご質問をいただいています。

インターネットの反応と同じで、こちらも宇都宮さんへの質問が多いですね。

< 山中さとしさんの質問 >

山中 今回のワールドカップの報道は確かに韓国賛美一色であったが、なぜメディアはこのような報道をする必要があったのでしょうか？

中塚 韓国賛美の報道の裏側にあるものを宇都宮さんはどう捉えているかという質問ですね。

宇都宮 なぜメディアが韓国賛美をしたかについては、正直私も聞いてみたいですね。私は「それほど隣国を賛美することもないだろう」という立場から、自分が思うところをそのままスポーツなどの連載で書かせて頂きました。

1つ考えられるとすれば、両国間の「不幸な歴史」への負い目が日本側にあったのではないかと、ということです。いわゆる「日帝時代」に対する日本の負い目が、今もずっと日韓両国の間に横たわっているのは、皆さんもご存じだと思います。

これは私の想像ですが、一方で日本はワールドカップを共催することで韓国に対して淡い期待感を抱いていたのではないのでしょうか。ここで思い出すのは、96年5月31日のことです。

翌日に迫っていた 2002 年大会の開催国発表が、前日になって突然「日韓共催」というニュースになって飛び込んできました。当時、私は映像の会社に勤務してまして、たまたま日本側の招致活動のビデオを制作する会社にいたのです。それを手伝っていた関係で、2002年の開催国が日本になるのか韓国になるのか、非常に注目していました。しかし、結局は共催。私は「これは負けに等しい引き分けだ」と認識しましたし、多くのサッカーファンも、翌日のメディアの報道もそういった論調でした。

ところがです。それから1週間も経たないうちに、「それじゃあ日韓共催でより良い関係を築いていきましょう」という論調が生まれ、気が付けば日本中を席卷してしまいました。その代わり身の早さに私は驚きましたね。

それでは、この共催は何をもって成功とするのか。日本としては、お互いがお互いを良く知って、手に手を携えて新たな一歩を踏み出そう！という予定調和的なイメージがあったのでしょうか。でもこれは、今にして思えば、やはり中学生の片思いですよ。

実際、韓国では共催の「きょ」の字もありませんでした。さらには、3位決定戦が終わった次の日、韓国ではもうワールドカップは終わっていました。そういったことを併せ考えると、やはり日本が抱いていた共催のイメージというのは片思いでしかなかった。それでも、「共催すればきっといいことがある」と信じたかったのでしょうか。それが、本大会での隣国の現実を目の当たりにした時には、もう取り返しのつかない状況になってしまっていた。そんなわけで、日本のメディアは共催を、そして韓国の躍進を賛美するしかなかったのではないのでしょうか。

< 吉田とおるさんの質問 >

吉田 中国は今回の韓国、日本をどう見たか、どう伝えたかを知りたい。

宇都宮 中国の人々が、日本についてどう考えているかは分からないのですが、韓国に対しては実際かなり反

発があったようです。特に若い世代には「あれは絶対に八百長だ」と主張してはばからない雰囲気があったそうです。インターネットだけでなく、一部報道でもそのよう記事が見られました。それがあまりにもエスカレートしたために、お上から「いい加減にしない」とお叱りがあったようです。

中国は中国で、いまだに世界の中心という意識がありますし、歴史的にも、韓国から貢物をもらっていたわけですから、なかなか韓国の躍進を認めたくない心理があったのかもしれない。

まあ色々なことがありますが、それでも韓国の代表チームは素晴らしい成績を収めたことは事実ですし、素晴らしいチームだったと思っています。ですから、これを見た中国が次にどんな強化をしてくるのか、私は密かに注目しています。

来年は中国で女子のワールドカップが開催されますし、2年後にはアジアカップ、2008年には北京でオリンピックが開催されます。きっと中国のことで、6年後のオリンピックに向けて、綿密かつ大胆な強化をしてくるのではないのでしょうか。ということは、2006年大会のアジア予選には、日本に新たなライバルが出現するというので、今後も中国には目が離せませんね。

橋本 韓国の報道について付け加えます。私は一般週刊誌に定期的に寄稿しており、今回ワールドカップ直前にも、サポーターの盛り上がり具合の状況について執筆しました。その時に担当編集者の方から、日韓のサポーター同士で盛り上がっているはずだから、その様子について書いて欲しいと言われました。

確かに「レッドデビルズ」と「ウルTRAS 2000」が一緒になって両方の国を盛り上げようという話が4年前にありましたが、コミュニケーション不足などにより、事前の活動、ムーブメントという形ではうまく盛り上がりできなかったところがありました。そうした状況でしたから、事実通りにうまく盛り上がらなかったということを書いても構わないのなら書くけれど・・・と言ったところ、日韓共催をキーワードとしてワールドカップそのものが盛り上がらないような話になるのなら、読者が興味を削ぐことになるから書かないで欲しいと言われました。

そういった意味でも、先ほど宇都宮さんのお話にありましたように、メディア側、マスコミでは日韓関係ということにもすごくナーバスになり、神経を払っているのですが、実際の私たちの感覚では、レッドデビルズとウルTRAS 2000 がうまく盛り上がらなかったと言われようが、韓国のサポーターと言われようが「??？」といった感じです。また、大先輩を前にしてこんなことを言うのは失礼かもしれませんが、昔の戦争、過去の悲惨な歴史と言われても、今の若者はピンとこないと思います。

それなのに、歴史を踏まえて盛り上がらなければならないと言われれば、若い人ほど反発を感じるだろうし、サッカーのレベルに限定して言えば、少し前までライバルだったチームを応援しようと押し付けられれば、2ちゃんねるのような形で反発が出るのも当然かなと思いました。

そうした一般の若い人たちの感情をメディアが冷静に正確に掴み、そのニーズに応えた形で報道しようという認識が欠けていた結果が、今回のような形になって表れたということを報道側も意識しなければならないと思います。

中塚 マスを対象とした新聞や雑誌では書けないようなことが潜伏して、今度はインターネットというパーソナルなところにどんどん広がっていくという構図が見えます。

橋本さんの発言の中で、戦争との絡みといったお話もありましたが、吉田さんはいらっしゃいますか？韓国から見た対戦国という視点が面白いですね。

< 吉田さんの意見 > ~ 韓国から見た対戦国 ~

吉田 3位決定戦を觀に韓国へ行き、当日の朝から昼、夜と、試合が近づくにつれ大邱(テグ)の街がだんだん真っ赤になっていくのをスゴイなと思って見ていました。

朝のニュースで、トルコは朝鮮戦争のときに友軍を派遣してくれた友好国であるといった報道がなされているのを見ました。それを見て「なるほどな」と思ったのが、決勝トーナメント・・・あっ、言っちゃった(笑)。セカンドラウンドでのイタリア戦の時の「アズーリの墓」や、ドイツ戦の時のクローゼの遺影。考えてみれば日本とドイツとイタリアは第2次大戦の時に日独伊三国同盟を結んで韓国を侵略していた側ですよ。それで彼らはエスカレートして“アンチ”の動きをした。トルコの場合は友軍だから試合が終わった後も友好的なムードだった。あれは別に準決勝が終わり、このままでは(雰囲気)良くないという意味で友好的なムードを作ったのではなく、単純に歴史的経緯の表れに過ぎないのではないかと思ったのですが、いかがでしょうか。

宇都宮 確かに、あの日もテグは真っ赤だったのですが、その一方で、試合前の雰囲気はすごく和やかだったことにビックリしました。しかも、「私たちはトルコをサポートします」といったような横断幕があったりする。さらに驚いたことに、相手チームの選手紹介の時には真っ赤なスタンドからはブーイングではなく拍手しているじゃありませんか。オイオイ、何か今日はいつもと違うぞ、どうしたんだ？ と思ってしまったわけです。その後、試合開始 11 秒でハカン・シュキユルがゴールを決めたものだから、オイオイ、そこまでサービスするのか、と(笑)。

実は、今回の大会で個人的に一番感謝したいチームは、トルコ代表なのです。まずは日本がベスト8入りするために足りないもの それを彼らは教えてくれたと思うのです。そして3位決定戦では、友好的なムードの中でもホームの韓国と正々堂々戦い、素晴らしいゲームを見せてくれた。試合終了後には、文字通り両軍入り乱れて手を取り合って場内を一周。吉田さんがおっしゃられた通り、あれはトルコだからこそ実現したフィナーレだったと思います。

余談ですが、韓国とトルコはともに54年大会が初出場、ワールドカップでは「同期」なのです。その時は7-0でトルコが勝っているのですが、これも何かの縁なのかな、と考えてみたりもします。

賀川 3位決定戦の後、手をつなごうと持ちかけたのはトルコの方なのです。その点、トルコは大人なのでしょうね。トルコは本来、対ロシアです。伝統的にトルコは対ロシア、対スラブだから、ゲルマンと仲が良い。敵の敵は味方ですから、サッカーでもドイツとつながりがあり、どんどん強くなってきているわけです。

釜本を教えてくれたユップ・デュアバルがドイツ代表監督を辞めた後にガラタサライを率いたり、昔からドイツとトルコは親交があります。ロシアの脅威を受け、朝鮮戦争の元になった共産主義国・ロシアと当たった韓国に対して、トルコは応援してくれる。そういう経緯があり、歴史はそうして生きてきているのです。

日本にも、昔韓国をイジメたというのがどこかに残っている。しかし、今回の場合は日本のメディアがそれを過剰に気にしていて、さらには韓国のメディアも、昔イジメられたというのを非常に意識していたのです。

国内で何か不都合がある度に日本を敵視させ、国民を1つにまとめるという李承晩(リ・シヨウバン)の時代の挙国一致政策が朴大統領の軍事政権に変わって以来、韓国も少しずつ変わってきたのですが、しかし教育は以前のまま。教科書を開けば、過去に日本がしたひどいことが載っています。その教科書も毎年少しずつ変わり、若者にはそうした意識が薄れているけれど、でもメディアが意識し続けている。大きなメディアは簡単に変えないというところは、日本も一緒ですよ。そうしたところに、今回は多少メディアの報道に無理があったかもしれない。しかし、大きいメディアに対して、どれだけ反論があったか、どれだけ投書があったかということも、1つの興味です。そこで今は、投書してもムダだと思っている何十万という人がインターネットに向かってはいるわけですが、その声が多かた実際どれほどのものなのか、それを調べていくのも、メディアの人間としては面白いでしょう。

それから、僕は3位決定戦はテレビで見ましたが、最初に洪明甫がボールを止め損なって、それまで眠っていて試合らしい試合をしていなかったノッポのセンターフォワード(ハカン・シュキユル)が急に働いて先に点を取りましたよね。あの時に、韓国スタンドは既に諦めムードになっていたのです。

僕は小さい頃から韓国の選手と対戦してきましたが、彼らは勢いに乗せたら本当にスゴイのですよ。それをどうやって止めるか、子供の頃からそればかり。立ち止まらせれば勝ち、走ってこられれば負けです。それは日本代表の試合を見ればよく分かりますよ。

イタリアの監督がデルピエロを引っ込めて、ディフェンスを出しました。ディフェンスを固めるといったって、あの時はネスタもカンナバーロもいなかった。普段のイタリアならあそこで固めれば勝てるかもしれないが、あれをやると韓国の選手は勢いづくのです。相手がひるんだと見た時の韓国は絶対に強い。日本の1番良い例が、98年の予選の時。山口が曲芸のような妙なシュートで1点入れた試合(笑)。韓国はそこまでいいペースでやっていて、あとは日本を防げば良いと思っていたはず。ただし、あの時、唯一困っていたのが初めて日本代表に出てきたブラジル人のロベス。ロベスを相手のセンターハーフが全然対応できずにいました。これは、外国人(ブラジル人)はうまいものだという先入観があるから。だから寄りが遅い。寄りが遅ければロベスはうまいですよ(笑)。それを、日本は1点リードしたものだから予定通りの行動ということで、相手が嫌がっているロベスを下げて、ディフェンダー秋田を入れ逃げ切ろうとした。一番嫌な奴がいなくなり、そのうえ中盤が空いたのだから韓国は「しめた」と思ったでしょう。そうなった時の韓国は強い。

ドイツも94年のあの暑いアメリカの会場で3点リードして、もう勝ったと思ったでしょう。彼らは油断したのです

よ。油断すれば、ドイツ人にとってあのアメリカの暑さはたまったものじゃない。足が止まってしまいました。そこで韓国は2点入れて、さらに追い上げようとしたのですね。相手がひるんだ時の韓国は絶対に強い。

トラバトーニは確かに名監督でしょうが、韓国のことは僕に聞いたほうがよかったネ(笑)。

<山中さんの質問>

山中 例えば、日本でワールドカップをやらなければ日本人の大半はフリーガンというものを知らなかった。それが、過熱報道されることで日本人の大半に知られることになった。こういうものだ、ということの人々が知ったという点においては、フリーガン報道は適切だったと言えると思います。また、フリーガンの騒乱を事前に防止するのもマスメディアの役割だという考えもあります。その点についてどうお考えですか。

木下 フリーガンという言葉が出てきたのが12月の2日頃。イングランドが日本で試合を行うと分かるとすぐ、本当にあっという間に出てきて、他に書くことは無いのか！と思うほどでした。イギリスに関する報道がそのままそれだけで終わってしまえば本当にひどいなと思っていました。私たちの仕事もしづらくなったでしょう。

しかし、大会が始まり、イングランドサポーターがやって来て、実際は皆いい人だということが分ると、フリーガンという言葉はまたあっという間に消えてしまいました。ですから私たちもホッとして、喜んでいました。

イングランドのサポーターたちは、どこに行っても同じような評判を得ています。他のヨーロッパ域内や南米は過去に同じ問題を抱えた経緯があるので背景を分かっており、フリーガンというのはそう特別なことではないので特に話題にはなりません。イングランドのサポーターたちは、外から入ってくる評判で、ではなく実際の行動で判断されたいはず。行動には何の問題も無かった。その事実で判断して欲しいですね。

マスコミがフリーガン騒動を抑制する。それについてはメディアが実際に何ができるか分からないのですが、とにかく刺激にならないように気をつけてもらいたいですね。

ヨーロッパにはフリーガン行動を取材したいがために自分からケンカを仕掛けたという例がありますが、それは許されない行為です。そのように直接的に問題を引き起こすということはないでしょうけれど、マスコミにはやはり責任がありますね。

橋本 6月に10都市開催地プラスアルファで近隣の街も色々回りました。

その地域に住んでいるごく普通の人たちに話を聞いて思ったのは、サポーターという言葉とフリーガンという言葉をも混同して使っている人が多い、ということです。テレビで稲本がゴールするシーンを見て喜んで、その程度の関心を持っている人にとっては、「フリーガン＝(イコール)サポーター」となっていました。フリーガン報道が1人歩きし、暴走してしまった結果が、こうしたところに表れていました。

それが今後そのまま定着するかどうかは分かりませんが、もしかすると日本では「フリーガン＝本当はいいヤツら」といった認識をしてしまう人も増えていくのではないかなという気がしています。

宇都宮 結局、日本人の誰もフリーガンを知らなかった、見た人もほとんどいなかった。そこが問題だったのだと思います。見たこともないもの、知らないものをなぜ報道できるのか、実に不思議です。

私はフリーガン研究者でも学者でもないのですが、大会前にあちこちから取材依頼を受けました。マスコミの人間からすると、フリーガンを知っている人、イングランドサッカーを知っている人というと、「じゃあ東本(貢司)さんかな」とか「宇都宮が何か書いているらしいぞ」とか、結局その程度だったみたいです。

いずれにせよ、今回の過剰なフリーガン報道の背景には、イメージの限界ゆえに必要以上に恐ろしく感じてしまうという受け手の側の問題もあったのでしょう。大会前に開催地でフリーガン訓練と称して外国人サポーターを懲らしめる映像をご覧になった方も多いと思います。でも、フリーガン役の警官も凝らしめ役の警官も、誰もフリーガンを見たことがないのですよ。見たこともないのに、大真面目に撃退する人・される人を演じている。あれを見ていると、私は終戦直後の竹槍訓練が思い浮かびましたね。鬼畜米英をやっつけるために竹槍を持っている人たちは、実際は鬼畜米英を見たことがなかったはず。フリーガン訓練には、それに近い滑稽さを感じました。

また、伝える側のメディアは人を不安がらせたり怖がらせることで視聴率を上げたり、発行部数を伸ばしたりするのが最近の傾向として顕著です。不景気、失業、少年犯罪、テロ……。その中にフリーガンをはめ込んでみたら、これがうまい具合にハマったのだと思います。

本来、マスコミが伝えるべきことは、いくらでもあったはずですが。それは、フリーガンとサポーターの違いや、フリーガンが生まれる背景などです。そうしたことを伝える、もっと言ってしまえば「啓蒙する」のがメディアの役割だと思うのですが、今回はそれを放棄して、ただただ「フリーガンが来るぞ、フリーガンが来るぞ」と、本当にそればかりを繰り返していましたね。

賀川 人には固定概念がありますからね。ついでに言うと、さっき僕は「最古の」と紹介されましたが(笑)、僕のことを日本のサッカー記者の草分けと言う人が多いのですよ。でも僕が新聞社に入った時には運動部長もオリンピック記者もサッカー記者も、スポーツ記者はたくさんいました。

朝日新聞社の忠鉢君は僕の家に来た時に「賀川さんが入られた時には運動部はありましたか」なんて聞くのですよ(笑)。「何言うたんねん。お前のお父さんが生まれる前、昭和4年から朝日スポーツというグラビア版があんねん」と言って全巻そろっているのを見せたら、「キャー。こんなのをうちの社で作っていたのですか」と言って驚いていましたよ(笑)。「会社のことぐらい覚えておいてくれよ」と言って笑ったのですけど。

ま、そうは言いながらも、ほとんどの記者はワールドカップへ行ったこともほとんどないし、ヨーロッパへ直に見に行ったこともない。フリーガンについて説明できる人というのはほとんどいないですよ。アジテーターが事件を起こし、きっかけを作り、どうやって一斉に蜂起するか、それをそばで見ているらスゴイですよ！日本の警官で収まるかどうか分かりません。それこそ竹槍で突かないとダメですよ(笑)。棍棒くらいじゃ全然ダメ。身体は大きいし、1杯飲んでるし、声も大きい。でもそれは全部アジテーターがいて扇動するものです。

80年のヨーロッパ選手権で5千人のイングランドサポーターがトリノスタジアムで蜂起しました。5千人のイングランド人が怒鳴れば、5万人のイタリア人より大きいくらいの声ですよ。それはやっぱり戦争をさせたらイングランドは強い。アルゼンチンなんて勝てないですよ。個人戦はものすごく強い。

でも普段は皆おとなしいのです。ただ、酒を飲んで陽気になっているから、アジテーターが入ったら終わり。ですから、いかにしてアジテーターを防ぐか。それはイングランドでも今回気を使ってきています。

札幌の空港には、フリーガンの顔を分かっている警官や対策員が来ていました。そうしてせっかくうまく収まったのだから、新聞は英国側の下準備や苦勞を書いてくれればいいのですよ。なのに新聞は事件が起こらないと面白くないからね。

僕なんかがフォーラムに呼ばれて「フリーガンなんて大したことないよ。放っておけばいいよ」と言ったら全然面白くないのですよ。「こんなに大変だ、大変だ」と言ってもらわないと、やった意味が無い。これが日本のメディアでね。だいたい組織的に仕事をするから、「ここにこういう記事を入れたい」とあらかじめ決めてしまったことは動かせない。

有名な大出版社が出ている、何とかという素晴らしいスポーツ雑誌がありますが、そこでもね……。ある時、日本サッカーの歴史についての企画で、書く試合を指定されたので枚数とページ全体の構成を聞くと、1986年のあと一歩でワールドカップに行けなかった試合と1968年の銅メダルが同じ分量で配置してあるわけですよ。いくらワールドカップとは言ってもね、木村和司のフリーキック1本では結局勝てなかったのに、それでも、「最も近づいた日」ということで、銅メダルを取ったことと同じ分量でと言うのですよ。「そんな俺書きたくないからね」と言ったら、もう2度と注文が来ないですね(笑)。

でも、現場を踏まずに頭で作るから、そういうものなのです。そういうところはいまだにしんどいですね。だから今回たくさん日本人記者が現場を踏み、直接ワールドカップを見たということは、日本サッカーにとってものすごくプラスになると思います。

<神戸アスリートクラブ・中山さんの質問>

中山 ワールドカップ用に新設されたスタジアムの、その後の利用法はどうなっているのか？

賀川 神戸には小学校のグラウンドの芝生化や、少子化により廃校になる学校をグラウンドのチェーンにするなどの案が盛り込まれた「神戸アスリートタウン構想」というものがあります。その中心になるのがウイングスタジアムで、今度スタジアム横に新しくフットサルコートができます。そんな風に一般的に使用していこうという計画です。

全天候性にするために、今度は上に覆いをつけます。本当ならワールドカップ終了直後にヴィッセルの試合でもやれば、スタジアムを見るだけでもお客は入るのでしょうけれど、工事に入っちゃうんですよ。余分な手間が入ってしまいますが、利用法はちゃんと考えていますね。

ここで1つ皆さんに申し上げておきたいことがあります。

東京オリンピック用に建設された国立競技場は、オリンピックが終わってから当分ガラガラでどうしようもなかったのですよ。国立競技場を作る時に、日本陸連の副会長だった春日弘さんという方から、「収容人数6万2千は多い、5万に下さい」と提案がありました。それは、残りの1万2千は仮設スタンドにしようという案でした。

今では狭くて困っていますが、1964年はその程度の認識でした。先日クラマー(デットマール・クラマー)が来た時に2人で大笑いしたのですが、「国立はあの後もしばらく使い道がなくて、そういえばダンスの会をしていたなあ」とクラマーが言うのですよ。ダンスの会というのは、創価学会の運動会だったのです。創価学会の会以外では、国立のスタンドがいっぱいになったことはありませんでした。

今では国立競技場は狭いと言われます。もちろん、1200万もの人口を抱える東京都に1つしかないというのがおかしいのですが、要は、国立競技場でも30年前はそんな状態だったということです。ですから、もう30年経った時に役に立っていればいいのですよ。日本はいくら貧乏になったとはいえ、これくらいのことでピクピクするような国じゃないですよ。

そこが日本です。先ほど韓国は国を挙げてワールドカップをやったと言いましたが、日本は片手間でやった国なのです。だからこそ日の丸をつけても・・・、皮肉っぽい言い方ですけど、「日の丸をつけても」日本代表選手は奇跡は起こせなかった。実力めいっぱい勝ちあがった。だけど、ちょっと強いトルコには勝てなかった。

韓国は奇跡を起こせた。別の見方をすれば、代表チームが奇跡を起こせる国というのは、やはり隣の国から見れば嫌韓感情が起こるようなこともあり得るのですよ。1936年のベルリン代表や1968年のメキシコ代表にとって、日の丸というのは特別な意味があった。今の日本代表はやっとなんか代というものを98年になって初めてフランスのスタジアムで1万人が歌ったという状態。今度も日本のスタジアムで歌ったわけですね。テレビのメディアにとって、これはもう「ああ、そういえば君が代歌ったなあ・・・」とビックリするような話なのです。

良い悪いは別として、日本はようやく国とか何とかという考え方ができてきた、そういう段階なのです。ようやくというこの段階で日の丸を着けても奇跡は起こらない。韓国は昔からずっと、日本と試合をする時も、1954年のワールドカップでも、大極旗を着けて国歌を歌う時というのは、それはすごい緊張感です。

何とかという歌手の変調君が代とか、誰々の正調君が代とか、日本にも色々ありますが、韓国の国歌に対する思いというのは別物です。日本代表が日の丸をつけて奇跡を起こせないのは少し淋しいが、それがいいのか悪いのか、僕自身日本に長く住んでいるけれど分かりません。今回、日本は実力通りやってのけた。だから2006年はもう少し実力を高めてベスト4へ行ってくれる。そう思っています。ちょっと余計なことを言いました。

終わりに

中塚 皆さんからもっと意見を頂ければよかったのですが、最後のディスカッションの時間が足りなくなってしまい申し訳ありません。

「観戦と交流」というテーマの中で、メディアの位置付けなど、関連する話題がたくさん出たのではないかなと思います。私も横でずっと話を聞いていて、色々思うところはあるのですが、1つだけ言うと、やはり、ワールドカップには出なアカンなあ。今回は開催国ということで出場したわけですが、そのおかげでチュニジアを知ることができ、ロシアを知ることができ、ベルギーを知ることができました。要するに、大会に出場すると、この国は一体どんな国なのだろうということで、日本の色んなメディアも向こうへ行ってその国のことを伝えてくれる。やはりこれは出場しないと、こうした動きにはならないと思いますね。韓国の場合は、54年に1度出て、その後86年から毎回出場しています。だからおそらく、我々よりもドイツやスペイン、トルコのことをいっぱい知っていたのではないのでしょうか。我々もこれから先ずっと出場しつづけて、外国のことを知り続けて仲間を増やしていくというのが、このワールドカップを通しての「観戦と交流の物語」のとりあえずの中締めとしては良いのかなと思います。

4年後は2006年。けど、我々の日常のスポーツシーンは日々訪れるわけですが、4年に1度の節目だけでなく、毎年毎年、ワールドカップ後の動きを確認していきたいなと思います。サロン2002ではこういったシンポジウムを毎年だいたいこの時期に開きたいと思いますので、よろしく願いいたします。

またその時に、お目に掛かれることを楽しみにしております。